

Contents

1.	はじめに——戦間期における「子供」への注目	1
2.	大正後期～昭和初期の子供関連メディアとイベント	6
3.	『コドモの本』の変容 ——文化的・教育的機関誌から全国向け子供雑誌、そして機関グラフ誌へ	18
4.	『コドモの本』から見えてくる「コドモの会」の活動	40
5.	むすびに変えて ——『コドモの本』に携わっていた人々と見落とされた側面	51

メディア史の中の『アサヒカイカン コドモの本』

———特色、変容、そこから見えてくるもの

前島志保

1. はじめに——戦間期における「子供」への注目

1926年（大正15年）10月、大阪の中之島に地上六階地下一階の総合文化施設・朝日会館が建設された。重工業の発達で当時「東洋のマンチェスター」とも称されていた大阪は、1925年4月に第二次市域拡張により人口（211万人）・面積（181平方キロメートル）ともに東京をしのぐ全国第一位の都市「大大阪」となり、第七代市長・関一のもとで計画的な都市政策が実行されつつあったが、大規模な各種公演や展覧会を行う施設が不足していた。朝日会館はこの不備を補うべく建設され、母体の新聞社とは一定の距離を保ちながら、音楽・映画・舞踊など独自の公演・上演、各種講演会、絵画や写真の展覧会、総合文化雑誌『會館藝術』の刊行など多彩な活動を展開、関西の近代文化史において重要な役割を果たし、「文化の殿堂」「大阪の文化の中心」と言われる存在になっていった¹。

¹ 当時の大阪の状況やイメージについては、原武史『「民都」大阪対「帝都」東京——思想としての関西私鉄』（講談社、1998年）、芝村篤樹『日本近代都市の誕生——1920・30年代の大阪』（松籟社、1998年）、橋爪紳也『モダン都市の誕生——大阪の街・東京の街』（吉川弘文館、2003年）、橋爪紳也編『大大阪イメージ——増殖するマンモス／モダン都市の幻像』（創元社、2007年）、橋爪紳也『映画「大大阪」観光の世界——昭和12年のモダン都市』（大阪大学出版会、2009年）、阿部武史・沢井実

この朝日会館では、開館間もない1926年10月から、子供を対象とした企画も継続的に行われていた。子供関係の企画は1928年には「アサヒコドモの会」に統一され、1931年からは機関誌『アサヒカイカン コドモの本』（以下『コドモの本』）も創刊、やがて絵画や音楽の教室「アサヒ・コドモ・アテネ」の活動も開始されるなど、様々な活動を展開していく。朝日会館が、「大阪における唯一のそして一番立派な美しい、楽しいコドモたちのための、お伽殿堂」²と自称するほどに子供を対象とする文化活動にも力を入れていた背景には、近代的家庭イメージの戦間期における社会的普及がある。

明治期において、一家団欒を楽しむ「家庭」（ホーム）像は、知識人の言論活動や文化改良運動を通して啓蒙・普及されるべき概念でしかなかったが³、大正期に入り、産業、経済、都市の発展と教育の普及を背景に出現した都市部の被雇用者（役人、サラリーマン）を中心とする新中間層が厚みを増してくると、近代欧米的な家庭生活は、彼らの生活実践の中である程度具現化されていく⁴。官民の様々な団体によって社会習慣全般の合理的改善を

『東洋のマンチェスターから大大阪へ』（大阪大学出版会、2010年）、酒井隆史『通天閣——新・日本資本主義発達史』（青土社、2011年）など。朝日会館開館の経緯については、中村喜一郎「朝日会館の事業について」（『會館藝術』1931年12月号、3-4頁）、春山武松「朝日会館展覽場が出来るまで」（『會館藝術』1931年12月号、18-19頁）。1931年までの朝日会館の活動については「朝日会館五ヶ年間各種催物一覧表」（『會館藝術』1931年12月号、58-116頁）、朝日会館とそこでの文化活動については、『會館藝術』復刻版全41巻（ゆまに書房、2017-2019年）各巻掲載の解説を参照されたい。

² 『コドモの本』2巻2号1932年4月号巻頭。

³ 南博「文明から文化へ」南博・社会心理研究所編『大正文化：1905-1927』勁草書房、1965、51-54頁。

⁴ 「家庭」「家族」概念の展開と普及に関しては、犬塚郁子「明治中期の「ホーム」論：明治一八～二六年の『女学雑誌』を手がかりとして」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』42号、1989年、49-61頁）、同「明治中期の『ホーム』論にみる家庭観と家政観：明治18-26年の『女学雑誌』を中心に」（『家族家政学』18号、1989年、15-20頁）、小山静子『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991年）、同『家庭の生成と女性の国民化』（勁草書房、1999年）、堀江俊一「明治末期から大正初期の「近代的家族像」：婦人雑誌からみた「山の手生活」の研究」（『日本民俗学』186号、1991年）、上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』（岩波書店、1994年）、牟田和恵（『戦略としての家族：近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、1996年、51-77頁）、西川祐子『近

目指す社会教育事業が進められ「生活改善」が各方面で叫ばれるなか、郊外に建つ和洋折衷の文化住宅に住み、平日には夫は電車・市電で職場に通勤し、妻は主婦として家事一切の采配をふるい、夜は一日の出来事を話しながら夕食をともして一家団欒を楽しみ、休日には家族そろって百貨店や各種催し物に出かけていく……という生活が、理想的な「文化生活」として人々の注目を集めるようになっていった。

明治期に理想とされていたような立身出世の実現が難しくなってきたことも、人々を家庭生活へと向かわせた一因と考えられる。明治 30 年代後半以降、日本の産業化が急速に進み、第一次世界大戦前後には非農業人口が第二次世界大戦後の高度経済成長期に次ぐ増加を示したが、これは、就業機会をめぐる競争と不安にさらされる人口が急増したということの意味する⁵。同時に、学歴により就職・昇進が左右されるようになり、雇用労働者のうち比較的上層に位置するいわゆる新中間層においては、社会上昇の可能性が狭まっていった⁶。このようななかで、「必ずしも出世しなくとも『安定した家庭生活が営めればよいのだ』という意識」が広がり、文化生活や家庭に対する関心が高まっていく⁷。育児や家庭生活は直接的には女性が担うものとさ

代国家と家族モデル』（吉川弘文館、2002 年）。「家庭」と「生活」の関連性および「生活改善」については、小山前掲書（1999 年）と西川前掲書（2002 年）のほか、以下を参照。祐成保志「生活改善と生活学の誕生」（『今和次郎研究』第 1 冊、日本生活学会、2003 年、83-101 頁）、栗原葉子「「すまい」と「家庭」思想：明治後半から大正期を中心にして」（『多元文化』第 3 号、2003 年、147-160 頁）、Sand, Jordan. *House and Home in Modern Japan: Architecture, Domestic Space, and Bourgeois, 1880-1930*. Cambridge: Harvard University Asia Centre, 2003.

⁵ 林宥一『「無産階級」の時代——近代日本の社会運動』青木書店、2000 年。

⁶ 天野郁夫『教育と選抜』（第一法規出版、1982 年）、同『試験の社会史』（東京大学出版会 1983 年）、同『学歴の社会史：教育と日本の近代』（新潮社、1992 年）、竹内洋『立身出世主義：近代日本のロマンと欲望』（世界思想社、1997 年）、海妻海妻径子『近代日本の父性論とジェンダー・ポリティクス』（作品社、2004 年）、Kinmonth, Earl H. *The Self-made Man in Meiji Japanese Thought: From Samurai to Salary Man*. Berkeley: University of California Press, 1981.

⁷ 引用は南前掲書（1965 年）2-7 頁。文化生活、家庭生活への関心の高まりについては、吉見前掲書、小山前掲書（1999 年）も参照。同様の傾向は、戦間期のアメリカにも見られた（LaRossa, Ralph. *The Modernization of Fatherhood: A Social and Political History*. Chicago: University of Chicago Press, 1997.）。

れたが、子供は資本主義競争原理による圧迫からの癒しともなり得たため男性も家庭生活に目を向けるようになり、大正期には「良夫賢父」論も登場する⁸。

もちろん、こうした理想的な文化生活を実際に営むことの出来る層は、まだ限られていた。門脇厚司らの推計によれば、1920年時点において、日本における新中間層の人口は約107万人（東京では20万人）、全就業者の4%（同13%）に過ぎなかったという⁹。明治後期（とりわけ第一次世界大戦）以降、各階層の所得が上昇し、生活に最低限必要なもの（衣食住）以外にも出費するという都市型生活が都市下層民でもある程度実現されるようになってはいたものの¹⁰、社会的な格差は依然として大きかった。今和次郎は1925年10月、東京の本所深川の人々の生活を観察し、「本所深川は東京の中枢部および山の手の人たちにとっては違う風俗の国なのです」と、社会的格差の大きさに注意を喚起している¹¹。朝日会館の文化活動が対象にしていた主たる層は、こうした都市下層民ではなく、新中間層以上の家庭だった。朝日会館における子供向け活動では、都市下層の子供達は年末の「同情週間」などの慈善事業の対象であり、文化活動の対象ではなかった。

とは言え、「文化生活」を営む中流家庭の理想像が繰り返し新聞・雑誌・広告で取り上げられたことで、都会の新中間層をモデルとした「近代的な家庭生活」像がイメージとして社会に広まっていったと言うことはできるだろう。1900年から実施された六歳からの四年制の無償の義務教育は1907年には六年制に延長されたが、既にこの年、義務教育の就学率は男98.53%、女

⁸ 海妻前掲書（特に265-269頁）。

⁹ 門脇厚司「第6章 新中間層の量的変化と生活水準の推移」（日本リサーチ総合研究所『生活水準の歴史的分析』総合研究開発機構、1988年、227-228頁）。

¹⁰ 東京では、明治後期（とりわけ第一次世界大戦）以降、各階層の所得が上昇し大正十年（1921年）以降米価が下落するに伴い、生活に最低限必要なもの（衣食住）以外にも出費するという都市型生活の形態が、まず新中間層、続いて工場労働者、都市下層民の間で実現化され、この傾向は不況下でも維持され、都市下層の家計が時々の子会の経済状況の影響を受け変動しやすいという点を除けば、おおむね昭和十年頃（1935年頃）まで続いた。中川清「第11章 近代日本の都市生活—都市諸階層の生活変動—」（『日本の都市下層』勁草書房、1985年、370-401頁）。

¹¹ 今「本所深川貧民窟付近風俗採集」（今和次郎著、藤森照信編『考現学入門』筑摩書房、1987年、167-168頁〔初出『婦人公論』1925年12月号〕）。

96.14%、平均 97.38%と、男女とも 95%を超えていた¹²。新聞は、大正末には二世帯に一部ほどの普及率を誇るまでになっている¹³。当時の新聞や大衆向け雑誌の文面は大抵ルビ（振り仮名）付きだったから、かなりの人々が中流家庭文化を称揚する言説を目にしていたはずである。そもそも文字など読まずとも、街中の多色刷りポスターは中流家庭生活・文化への憧れを煽っていたことだろう¹⁴。

新しい家庭像は、主に夫婦とその子供達により構成された核家族を規範としていた¹⁵。このため、子供に焦点を当てた様々な文化活動も行われるようになり、子供を対象とした出版物も増えていく¹⁶。このような風潮と出版界の産業化のもとで、朝日会館においても子供関係の様々な文化活動が展開されていった。本論では、戦間期日本における子供関連の様々な文化活動を出

¹² 文部省調査局編『日本の成長と教育：教育の展開と経済の発達』帝国地方行政学会、1962年、180頁。

¹³ 1904年には全国主要日刊紙63紙の一日あたりの総部数は163万部だったが、日本で初めて『大阪毎日新聞』『大阪朝日新聞』が100万部を突破した1924年には、新聞の総発行部数が推計625万部で、9.28人に一部の普及率になった。十年後の1934年には全国の新聞総発行部数は一日平均1080万部に達し、対人口普及率は6.16人に一部、世帯構成人数を平均5人とする、一世帯に一部弱までに高まった（内川芳美編『日本広告発達史（上）』（電通、1976年、198-199、294-295頁）。『毎日新聞』『朝日新聞』の発行部数については、以下も参照。朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 資料編』（朝日新聞社、1995年、320-321頁）、社史編纂委員会『毎日新聞七十年』（毎日新聞社、1952年、233-234頁）、毎日新聞百年史刊行委員会編『毎日新聞百年史：1872-1972』（毎日新聞社、1972年、370-371頁）、川上富蔵編著『毎日新聞販売史 戦前・大阪編』（毎日新聞大阪開発、1979年、242-243、306-307、316、388、405頁）。この時期の新聞の展開については、山本武利『新聞と民衆』（紀伊國屋書店、1978年）、同『近代日本の新聞広告と経営』（朝日新聞社、1979年）、同『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版会、1981年）、有山輝雄『「中立」新聞の形成』（世界思想社、2008年）。

¹⁴ 街の至るところに広告が溢れ出していった当時の様子については、北田暁大『広告の誕生：近代メディア文化の歴史社会学』（岩波書店、2000年）。

¹⁵ 実際、大正期以降は日本でも夫婦と子供から成る核家族率は一貫して高く、また、死亡率の低下に伴い以前よりは少ない子供を一家で生み育てる傾向にあった。国立社会保障・人口問題研究所の人口統計資料集（2020年度版）の表7-11「家族類型別世帯数および割合」によれば、「普通世帯」（1980年以前に使われていた世帯区分で、「住居と生計を共にしている人の集まり」「一戸を構えて住んでいる単身者」を含む）

版に焦点を当てつつ概観したうえで、朝日会館発行の雑誌『コドモの本』の特色について考察する。なお、1931年に創刊されたこの雑誌は、一説によれば通巻1408号まで刊行されていたと言われ¹⁷、かなり長期間にわたって刊行されていたことがうかがわれるが、現在確認できるのは、1932年から1935年までの欠号を含む40冊のみである。しかし、創刊から数年間とは言え、現存する誌面からは、『コドモの本』が様々な試みの末に独自の出版物としての歩みを見せていたことがうかがわれる。

2. 大正後期～昭和初期の子供関連メディアとイベント

印刷メディアと視聴覚メディア

大正後期から昭和初期（1920年代～30年代）のいわゆる戦間期に相当する時期の子供関連メディアの状況は、どのようなものだったのだろうか¹⁸。

前述したように、この時期には、都市部の新中間層を中心に近代的な家庭生活および子供への関心が高まり、識字率の向上と出版関連の全国組織の整備もあり、子供向けの様々な出版物が登場する。書籍では、子供向けの円本とも言うべき『日本児童文庫』全76冊（アルス、1927-1930年）や『小学生全集』全88巻（興文社・文芸春秋社、1927-1929年）が刊行され、1930年代に入ると、幼児から中学生・女学生までを対象に月に約四冊出された絵本シリーズ『講談社の絵本』（大日本雄弁会講談社、1936-1942年）も出版された。

子供向けの雑誌も多数刊行された。雑誌がメディアの花形だったこの時代、子供向け雑誌は、「婦人雑誌」「大衆雑誌」に次いで大きな発行部数を誇る、非常に魅力的な「商品」だった。雑誌取次を中心に行っていた東京堂の調

における「核家族世帯」（「夫婦のみ」「夫婦と子供」「男親と子供」「女親と子供」を含む）の割合は、1920年には55.3%で最も多い家族類型となっている。

¹⁶ 子供への注目が子供を中心とする核家族の家庭文化への注目でもあったという点については、小山前掲書（2002年）を参照されたい。

¹⁷ 朝日会館第四代館長・十河巖の証言による。愛川潔編・十河巖筆『朝日会館史（大阪朝日編年史別巻）』朝日新聞社史編修室、1976年、12頁。

¹⁸ 以下、特に断りの無い限り、書籍・雑誌については日本児童文学会編『児童文学事典』（東京書籍、1988年）の関連項目を参照した。

査に基づく『出版年鑑』所収のデータによれば、「少年少女雑誌」（主要 13 種）と「幼年雑誌」（主要 30 種）の年間発行部数は、1927 年（昭和 2 年）には 710 万と 550 万だったのが、その後、昭和恐慌後の不況の影響が出た 1931 年・1932 年を除いて着実に部数を延ばし、十年後の 1937 年には 1189.7 万と 820.5 万に達している¹⁹。ちなみに、同調査によれば、「婦人雑誌」（主要 8 種）・「講談娯楽雑誌（昭和 10 年／1935 年版より大衆娯楽雑誌）」（主要 11 種）・「政治経済文藝及科学雑誌」（主要 10 種）の年間発行部数は、それぞれ、1927 年に 945 万・1230 万・375 万、1932 年に 1680 万・1420 万・710 万、1937 年には 1951.5 万・2538 万・523.7 万だった。「少年少女雑誌」「幼年雑誌」は、「講談娯楽雑誌（大衆娯楽雑誌）」「婦人雑誌」に次ぐ発行部数を誇る雑誌ジャンルだったのだ。

この時期の子供向けの雑誌には、大きく分けて、娯楽性に富んだ大衆的なもの、子供の自己表現力の涵養を目指した芸術的なもの、知育に焦点を当てた教育的なものがあった。娯楽性に富んだ大衆的な子供向け雑誌の代表例は、大日本雄弁会講談社の『少年倶楽部』（1914-1962 年）だろう。同誌は、吉川英治の「神州天馬俠」、佐藤紅緑の「あゝ玉杯に花うけて」、南洋一郎の「吼える密林」といった長編小説、田河水泡の漫画「のらくろ」などが評判となり、1936 年には発行部数は 75 万部にまで達した²⁰。少女向けでは、吉屋信子の「花物語」（1916 年以降断続的に連載）で人気を高めた『少女画報』（東京社、1912-1942 年）、吉屋信子や川端康成の小説と中原淳一の挿絵が好評だった『少女の友』（実業之日本社、1908-1955 年）があった。

これらの雑誌が商業的な成功を収める一方で、子供の個性を尊重しようとする教育思潮の広まり²¹を受けた芸術性や知育的な要素に富む雑誌もまた、

¹⁹ 主要少年少女雑誌・幼年雑誌の年間発行部数については、宮本大人「昭和戦前・戦中期における子供漫画出版の基盤形成」（『出版研究』50 巻、2019 年、50 頁）も参照。

²⁰ 講談社社史編纂委員会編『クロニク講談社の 90 年』講談社、2001 年、172 頁。

²¹ 第一次世界大戦後ヨーロッパを中心に各地へ広がっていった平和主義的・自由主義的な風潮や、スウェーデンの社会思想家エレン・ケイ（Ellen Karolina Sofia Key）、アメリカの哲学者・教育家ジョン・デューイ（John Dewey）らの著作が刺激となり、1921 年には講演会「八大教育主張」で児童の個性尊重を中心とする諸学説（八大教育主義）が説かれ評判となり、児童尊重主義を取り入れた成城小学校（1917 年）、自由学園（1921 年）、文化学院（1921 年）などの私立学校が創設された（山住正己『日

戦間期には刊行されていた。芸術に力を入れた雑誌には、子供のための芸術としての童話・童謡の開拓に力を入れ、鈴木三重吉による綴方、北原白秋による児童自由詩、山本鼎による児童自由画の提唱で知られる童話童謡雑誌『赤い鳥』（赤い鳥社、1918-1929、1931-1936年）や、教育学者・倉橋惣三が監修し、モダンな絵とデザインが特徴的だった幼児向け絵雑誌『コドモノクニ』（東京社、1922-1944年）などがある²²。教育的な雑誌としては、小学館の学年別学習雑誌が1922年から刊行されはじめたほか²³、『コドモノクニ』の監修をしていた倉橋惣三が編集顧問を務めた多色刷り絵雑誌『キンダーブック』（フレーベル館 1927-1942年）もこの時期に創刊された²⁴。

このほか、駄菓子屋や縁日の露店などで売られていた非常に廉価な赤本絵本もあった。子供向けの大衆的な雑誌（『少年倶楽部』『少女の友』など）や芸術的・教育的な月刊の子供向け雑誌（『赤い鳥』など童謡童話雑誌および『コドモノクニ』など絵雑誌）の多くは定価が一冊50銭ほどで、一冊5～10銭の赤本絵本に比べると非常に高価なものだった²⁵。月刊誌は中流以上の家庭の子供達を、赤本絵本は中流の下以下の子供達を、それぞれ主なターゲットに想定していたと考えられる。もっとも、しばしば低俗として批判されることもあった赤本絵本だったが、昭和期に入ると武井武雄や熊谷元一など若手の童画作家も関わったものもあらわれ、実際には中流以上の家庭の子供達をも引き付けていたようだ²⁶。また、江崎グリコや森永製菓から絵雑誌・絵

本教育小史』岩波書店、1987年、91-117頁）。

²² 大正期の芸術的な雑誌については、岩崎真理子「第19章 大正デモクラシーと自由教育運動の中で」「コラム 絵雑誌創刊ラッシュの大正時代」（鳥越信編『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅱ 15年戦争下の絵本』ミネルヴァ書房、2002年、323-339頁）。

²³ 1922年『小学五年生』『小学六年生』、1924年『小学四年生』、1925年『セウガク一年生』『セウガク二年生』『せうがく三年生』、1932年『幼稚園』『子供園』がそれぞれ創刊。

²⁴ 1926年に制定された幼稚園令で「観察」が加えられたことを受け、「乗物」など一つの題材を取り扱う「観察絵本」として刊行された。『キンダーブック』については、樺山紘一・棚橋美代子・山口美佐子・本多真紀子『キンダーブックの90年——童画と童謡でたどる子どもたちの世界』凸版印刷株式会社 印刷博物館、2017年。

²⁵ 定価については、宮本前掲論文53、63頁、および大橋前掲論文63頁。

²⁶ 1936年大阪東区の幼稚園10園で行った絵本調査は、実際には中流以上の子供達も赤本絵本に親しんでいたことを示している（鳥越信編、前掲書、2002年、64頁）。昭和

本など景品（おまけ）付きの菓子が発売され始めたのも、この頃だった²⁷。

戦間期には、聴覚メディアも子供向けのコンテンツを増やし始めている。レコードでは、1919年にニッポノホン（日本蓄音機商会のレーベル）でお伽歌劇『茶目子の日』（佐々紅華作詞・作曲）が発売され、続いて翌1920年にやはり同レーベルから出された『かなりや』（西條八十作詞、成田為三作曲）が人気になると、各社が競って童謡のレコードを出すようになる²⁸。導入当初は「家庭の団欒促進」のための新しい娯楽としてとらえられていたラジオ放送も²⁹、子供向けの番組を制作していく。1925年には、放送開始直後のラジオ放送（ラジオ第一放送）で月～土曜の夕方の帯番組「子供の時間」が始まり、1928年からは東京・大阪・名古屋の局が持ち回りで作る全国放送番組となる。この番組は『月刊コドモのテキスト』（日本放送協会）とも連動していた。1928年から毎週日曜に大阪中央放送局が放送していた「コドモ日曜新聞」をもとに、1932年からは子供向けのニュース番組「コドモの新聞」（東京中央放送局）の全国放送も開始されている。ただし、ラジオがある程度家庭に広まるのは戦時期に入ってからであり、戦間期の家庭に

初期の赤本絵本については、大橋真由美「第4章 出版統制による絵本の変遷——金井信生堂刊行絵本の場合」（鳥越信編、前掲書、2002年、59-74頁）、川北典子「第5章 子どもの暮らしと赤本絵本」（鳥越信編、前掲書、2002年、75-87頁）、道端香苗「第10章 絵本の質的向上を目指して——鈴木仁成堂の出版活動」（鳥越信編、前掲書、2002年、195-210頁）。

²⁷ 江崎グリコは、1927年おまけつきキャラメルの販売を開始、1932-40年には引き換え景品ついて「グリコ文庫」を始めた。一方、森永製菓は、1930年に森永クウボン（景品の一つに絵雑誌）、1931年には立体絵本の景品付き「少年少女キャラメル」（1933年より「ミゼット」）、1932年に「絵本キャラメル文庫」全10集、1933年から景品の絵雑誌『漫画文庫』の販売を開始した。平岡弘子「第17章 企業と絵本」（鳥越信編、前掲書、2002年、305-321頁）。

²⁸ 原詩「かなりや」は『赤い鳥』1918年11月号に掲載、曲譜とともに「かなりや」として同誌1919年5月号に掲載されている。楽譜やレコードなど新しいメディアの登場・発展のもと、音楽と文芸のせめぎ合いを通して童謡が大衆文化となり、子供が文化の担い手となっていた様子については、周東美材『童謡の近代——メディアの変容と子ども文化』岩波書店 2015年。近代日本における童謡の展開全般については、畑中圭一『日本の童謡——誕生から九〇年の歩み』平凡社 2007年も参照。

²⁹ 坂田謙司「草創期〈ラジオの「姿」〉」『マス・コミュニケーション研究』第61号、2002年、162-175頁。

におけるメディアの中心は出版物だった³⁰。

イベント——「場」との結びつき

子供を中心に家族で楽しめる娯楽として、「子供」「家庭」「婦人」をテーマに据えたイベントも多数開催された。既に1906年には東京・上野および京都で日本初のこども博覧会が開催され³¹、1909年以降、三越による児童博覧会が毎年春に開かれていたが、新聞社も同様の催しを開くようになる。新聞社が主催した主なものとしては、1915年の国民新聞社による家庭博覧会（東京・上野）、1916年・1918年の二回にわたり読売新聞社によって開催された婦人子供博覧会（東京・上野）、1919年の大阪朝報による婦人子供博覧会（大阪・天王寺公園）、1926年の東京日日新聞・大阪毎日新聞による（皇孫御誕生記念）こども博覧会（東京・上野、京都・岡崎公園）、1933年の東京日日新聞による万国婦人子供博覧会（東京・上野）がある。朝日新聞社も、1922年3月10日から7月31日にかけて東京府が上野公園で開催し

³⁰ 1932年に11.1%だったラジオの普及率は、受信契約の増加数が過去最高となった1941年には45.8%、1944年には50.4%に達した（日本放送協会編『日本放送史上』日本放送出版協会、1965年、623頁、日本放送協会編『20世紀放送文化史 下』日本放送出版協会、2001年、532頁）。この時期のラジオについては、竹山昭子『ラジオの時代——ラジオは茶の間の主役だった』（世界思想社、2002年）も参照。子供向けラジオ番組については、葉口英子『昭和初期（1935-1937年）のラジオ番組『子供の時間』にみる音楽に関する考察』（『静岡産業大学情報学部研究紀要』第10号、2008年、79-96頁）、大地宏子『NHKラジオ番組「子供の時間」に見る戦前の音楽教育の一考察—番組月刊誌『コドモのテキスト』における「特選童謡」を中心に』（『鶴見大学紀要』第3部保育・歯科衛生編、2011年、51-60頁）、畠山兆子『JOBK「子供の時間」の研究—足立勤の入局と新企画—』（『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第34号、2021年、1-12頁）。

³¹ 1901年のフランス・パリの子供博覧会から刺激を受け開催された。是澤優子「明治期における児童博覧会について（1）」（『東京家政大学研究紀要1人文社会科学』35号、1995年、159-165頁）、中村喜代子「近代日本における＜子ども＞イメージとこども博覧会2：こども博覧会の端緒について」（『美術教育学：大学美術教科教育研究会報告』19号、1998年、223-235頁）。子供博覧会全般については、是澤優子「明治期における児童博覧会について（2）」（『東京家政大学研究紀要1人文社会科学』37号、1997年、129-137頁）、同「大正期における三越児童博覧会の展開」（『東京家政大学博物館紀要』13号、2008年、39-46頁）。

た「平和記念東京博覧会」に参加し、3月25日には「朝日デー」を設け³²、その一環として「子供大会」を開催、童話・少女音楽・少女舞踊・童謡音楽といった公演および児童活動写真の上映を行っている。

都市部を中心に行われたこうした催しは、新聞や雑誌によってその都度報じられた。ただし、当時は、全国紙となっていた大新聞でも、大阪と東京ではかなり紙面が異なっていたことには留意しなければならない。たとえば、1922年の「朝日デー」開催にあたり、『東京朝日新聞』は2月28日から4月24日にかけて38の広告や記事で、開催の周知・当日の様子の報道・後日談の紹介（写真コンテストの結果発表と展覧会の報道）を行い、そのうち3つの記事で「子供大会」を扱っているが³³、『大阪朝日新聞』掲載の「朝日デー」関連記事は3月13日朝刊第七面と3月26日夕刊第二面の2つだけであり、「子供大会」に言及した記事は無い。逆に、大阪で開催されたイベントについて東京で報じられることもほとんどなかった。一例として、1919年11月24日午後、大阪朝日新聞社の主催で講演会と音楽会を兼ねる形で中央公会堂で開催された（午前中は同社楼上で発起人会）婦人会関西聯合大会の大阪と東京の『朝日新聞』における報道の様子を見てみよう。『大阪朝日新聞』は、講演者の山田わか・平塚雷鳥、ピアニストの久野久子らの写真とともに、11月10日から25日まで連日、数段抜きの大きな見出し付きの記事でこのイベントを「文化史上の一異彩」として宣伝・報道した。他方、『東京朝日新聞』は11月25日第七面に「関西婦人会／聯合大会／大朝社の主催／文化運動の魁」というさほど大きくはない記事を一度、掲載しただけだった。

このように、「場」に規定された催しの情報を臨場感を伴って全国的に共有することは、複数の地域で似たような催しを同時開催しない限り、なかなか困難な時代だった。「場」に制約されたイベントを新聞で全国に同時に発信していくには、同じようなイベントを複数個所で開催する必要がある

³² 「子供大会」「映画の夕大会」「写真競技大会」「余興館大割引」（朝日デーに協賛した他のパビリオンの割引）が行われ、当日の入場者には特製の博覧会と東京市内外についての「美麗な案内記」が配られた（「平和博の「朝日デー」」『東京朝日新聞』1922年3月6日夕刊第一面）。

³³ 『東京朝日新聞』1922年3月10日と17日の朝刊第五面に広告を掲載し、3月25日朝刊第九面には記事を掲載。

た³⁴。後述するように、このようなメディア状況は、朝日会館における子供向けの文化活動にも影響していくことになる。

販売促進戦略との結びつき

子供向けのイベントには、十数年先を見越した長期的な販促活動・宣伝活動という意味合いもあった。玩具・衣服そのほか子供に関する様々な品が展示され、三越少年音楽隊の演奏とともに大評判となった三越の児童博覧会の開催には、1897年以降、高島平三郎らを中心に欧米の研究を取り入れた児童研究運動が盛んになっていたという背景もあったが、より直接的には、欧州の百貨店視察から帰国した専務取締役の日比翁助が打ち出した経営戦略の一環という意味合いが強かった。すなわち、教育への貢献により企業イメージの向上を図り³⁵、子供向け商品の販促を行なうとともに、子供に三越への親近感を覚えさせ将来の顧客を作るという、長期的な消費者開拓戦略でもあった³⁶。児童博開催にあたり、東京では1909年に巖谷小波、新渡戸稲造、

³⁴ たとえば、東京と京都で同時開催された1926年の皇孫誕生記念こども博覧会は、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』のどちらにも記事が出ている。とは言え、両者のイベント内容は全く同じものというわけではなかった。

³⁵ 「〔児童博が〕今まで寸毫の利を争うて居るのみの呉服店と思って居った三越が、各家庭のこどもさんの遊び所になる、多くのこどもを教育的に指導するという精神的寄与は都下の各家庭に好感を与えたのは申すまでもない」（濱田四郎『百貨店一夕話』日本電報通信社、1948年、133頁。津金澤聰廣「第5章 百貨店のイベントと都市文化」、山本武利・西沢保編『百貨店の文化史』世界思想社、1999年、131-132頁の指摘による）。

³⁶ 三越の初代宣伝部長・濱田四郎によれば、日比翁助は子供を十年先の三越の重要な消費者として見ており、「児童博」を「遠大の理想的広告」として成功だったともらしていたという（濱田前掲書134頁。津金澤前掲論文132頁の指摘による）。吉見俊哉は、三越の児童博覧会が消費者としての児童に注目した点に博覧会としての新しさを見出している（吉見俊哉『博覧会の政治学：まなざしの近代』中公新書、1992年、162頁）。百貨店・こども博覧会と消費文化の結びつきについては、以下も参照。神野由紀『趣味の誕生——百貨店がつくったテイスト』（勁草書房、1994年、164-172頁）、中村喜代子「近代日本における＜こども＞イメージとこども博覧会：三越におけるこども博覧会の濫觴」（『美術教育学：大学美術教科教育研究会報告』18号、1997年、215-225頁）、大島十二愛「メディアとしての博覧会：みつこしタイムスにみる「文化の展示場」三越児童博覧会」（『新聞学』18号、2002年、43-66頁）；是澤

坪井正五郎、黒田清輝、高島平三郎などの学者・芸術家・教育家らが常設の「児童用品研究会」を発足させ、大阪三越でも当地の教育や子供向け文化の発展に寄与していた伊賀駒吉郎、橋詰良一、辻村又男、高尾亮雄らが1913年3月に「大阪こども研究会」を結成し、企業イメージの向上と商品開発など、子供と家庭生活をマーケットの対象としていくための活動を行っていった³⁷。

消費文化との結びつきは、新聞社主催の子供博覧会にも明確にあらわれていた。1926年に東京と京都で開催された東京日日新聞・大阪毎日新聞社主催のこども博覧会に関する『サンデー毎日』の記事「こども博覧会案内」は、「「こども博覧会」は、こどもの博覧会であり、同時に子を持つ親たちの為への博覧会でもあります」と記し³⁸、子供だけではなく、実際に商品購入を行う大人に向けたイベントでもあったことを示している。実際、カルピスデー、お菓子デー、おもちゃデー、牛乳デー、松竹キネマデーなどの特別イベントは、子供だけではなく家族で楽しむことができるもので³⁹、会場には、おもちゃ館、きもの館、こどもの部屋、娯楽遊戯場のような子供本位の「意義ある娯楽室」とともに、教育館、母の家、健康相談所など明らかに親・教育者向けの施設もあった。大阪毎日・東京日日新聞社社長の本山彦一は、「東京こども博」の慰労会において、同博が「販売拡張」の「役回り」を「完全に遂行し得た」と自画自賛している⁴⁰。

大人向け出版物も子供を対象にした企画を掲載し始める。子供をターゲットにすることで、親の購買意欲を煽るとともに、将来の購読者を開拓しようとしたのだ。たとえば、1920年代から30年代にかけて全雑誌の中で一、二

前掲論文（2008年、39-46頁）。

³⁷ 加藤理「大阪の誕生期「児童文化」活動と後藤牧星」『大阪国際児童文学館紀要』第22号、2010年、5頁。

³⁸ 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社『サンデー毎日』第五年第五号 1926年1月17日6頁。

³⁹ 大島十二愛「新聞社の企業化と子ども文化事業：大阪毎日新聞社のこども博覧会と日刊こども新聞誕生を中心に」『マス・コミュニケーション研究』70号、2007年、185頁。

⁴⁰ 故本山社長伝記編集委員会『松陰本山彦一翁』大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、1937年、351頁。

の発行部数を誇っていた『主婦之友』は、1917年の創刊以来、読者参加型の「判じ絵」や「童謡舞踊」の紹介など子供向けの企画を載せていたが、1931年1月号での「(冒険お伽) 光ちゃん友ちゃん」連載開始とともに、子供層の取り込みを本格化させる⁴¹。1932年10月号から掲載が始められた「主婦之友お子様画報」(着色8頁)は、童話・漫画・科学記事・クイズ・お子様懸賞・工作の附録などを含むもので、1935年1月号から四色(4月号より六色)オフセット24頁の「コドモノトモ」に拡大された。創刊者の石川武美は「お子様画報」の「ねらい」について、「子供たちの胸の中にいつまでも、「あれはお母さんの雑誌の中にあつた」という記憶を、はっきりと印象づけておきたい」と語っていたという⁴²。この言葉は、子供向け企画の導入が将来の購読者予備軍を作るという販売戦略でもあったことを示唆している。

新聞も販売促進のために子供向けや家庭向けの企画を紙面に取り入れている。『読売新聞』は、1914年4月3日より一頁全面を使った「婦人附録」(のち「よみうり婦人欄」)を開設し、1916年3月19日から同欄内で「こどものしんぶん」の掲載を開始、1921年8月7日・14日には「よみうり婦人欄」の特別版「子供さんと母さんへ」を始め、8月21日にはこれを「お子さんのページ」とし(のち「コドモノページ」「子供のペイヂ」「子供のページ」など)、子供向けの記事のほか、「こどもしんぶん」、投稿欄(「どうよう(童謡)」「自由画」)などのコンテンツを含む、完全に子供向けのページを創設している⁴³。その後、『読売新聞』は、1924年に入社した正力松太郎の指揮のもと、1924年12月20日には雑誌『婦人と子供』を創刊⁴⁴、1925年に

⁴¹ 『主婦之友』における絵本については、竹内オサム「第7章 漫画家による絵本——主婦之友のシリーズ」「コラム「コドモノトモ」の執筆陣」(鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ 絵入本から画帖・絵ばなしまで』ミネルヴァ書房、2001年、107-121頁)も参照。

⁴² 主婦の友社編『主婦の友の五十年』主婦の友社、1967年、12頁。

⁴³ 「婦人欄」の特別版「子供のページ」はおおよそ日曜日に掲載されていたが、1924年4月20日からは「今日は日曜 子供のページ」という謳い文句とともに掲載されるようになり、同年7月25日からは「今日の水曜は子供のページ」など謳い文句付きで水曜掲載となった。

⁴⁴ 『婦人と子供』は、日曜の「婦人附録」に代わり月二回の発行で創刊されたが、1925年4月5日の日曜婦人附録復活とともに、月刊となった(「社告」『読売新聞』1924

は家庭文化展覧会（上野）の後援（4月1日）、人気歌人・九条武子らの「婦人欄」顧問への起用（5月9日）、「ラジオ版」新設（11月15日）などの改革を立て続けに行い、大阪系新聞に圧倒され経営難に陥っていた売上を三年で二倍以上に押し上げた⁴⁵。「よみうり婦人欄」の好評を受け、『東京朝日新聞』も、それまで1-2段程度の分量しか割り当てられていなかった「家庭」欄を1930年年3月16日から半ページほどに拡大、翌1931年5月1日からはさらにこれを「家庭面」に拡張し「女性相談」（身の上相談）を開始した⁴⁶。以前より「家庭欄」があった『大阪毎日新聞』など他紙も、家庭欄・婦人欄を増設・拡張している⁴⁷。

1930年代に入ると、新聞社の子供向け出版物はますます充実していった。東京では、1931年5月17日、『読売新聞』が日曜朝刊の付録として、子供向けのニュース、冒険小説、少女小説、漫画、野球解説などを満載した『よみうり少年新聞』（色刷り4頁）の刊行を開始した⁴⁸。後述するように、1931年5月24日には『東京朝日新聞』も日曜朝刊で「コドモ」欄を始めている⁴⁹。さらに、時事新報社は、本紙とは独立した子供向け新聞『日本小学生新聞』を1936年9月21日から刊行開始する。大阪毎日新聞社も、1936年12月22日に小学生向けのニュース記事や社会記事、冒険もの、学習記事、漫画、作文・詩・俳句・図画などの投稿などを掲載した『大毎小学生新

年11月23日第二面、「[社告]美しい春の読み物 日曜附録を復活」『読売新聞』1925年4月4日第二面）。

⁴⁵ 南博ほか編前掲書（1965年）347-348頁。

⁴⁶ 「女性の悩みと迷ひにお答えします／家庭面に『女性相談』を新設／山田、三宅両女史が担当」『東京朝日新聞』1931年4月29日第七面。

⁴⁷ 下川耿史・家庭総合研究会編『増補版 昭和・平成家庭史年表』河出書房新社、2001年、29頁。婦人欄・家庭欄については、川嶋保良『婦人・家庭欄こと始め』（青蛙房、1996年、158頁）、「婦人家庭欄」石川弘義・津澤聰廣ほか編『[縮刷版] 大衆文化事典』（弘文堂、1994年、674-675頁）、下川耿史・家庭総合研究会編『明治・大正 家庭史年表』（河出書房新社、2000年、392頁）も参照されたい。

⁴⁸ 読売新聞100年史編集委員会編『読売新聞百年史』読売新聞社、1976年、326-327頁。

⁴⁹ なお、『東京朝日新聞』はこれに先立ち、早くも1907年9月19日朝刊第六面に「子供の領分」と題して子供向けの物語（童話）を掲載している。また、1921年年末には、「懸賞募集の子供の顔〔写真〕、子供の読物、漫画、写真等奇想天外の趣向に充てる子供本位の面白い頁」（「新年初頭の本紙」『東京朝日新聞』1921年12月30日第三面）と告知し、1922年1月1日に元旦四頁附録として「子供ページ」を掲載した。

聞』を創刊、当初は27万部の発行部数に達した。東京でも、東京日日新聞社が合併で時事新報社から引き継いだ『日本小学生新聞』を1937年1月5日より『東日小学生新聞』に改題して刊行していく。なお、大阪毎日新聞社は、1911年に既に日報社（『東京日日新聞』を発行）を合併していたが、大阪の『大毎小学生新聞』と東京の『日本小学生新聞』は、タブロイド判4ページで月25銭という体裁は共通していたものの、記事内容も読みものも全く別で、独自の取材と編集に基づいていた⁵⁰。

当時大毎販売部長だった鹿倉吉次が『大毎小学生新聞』創刊時を回顧した次の言葉は、小学生新聞の刊行が、ライバル紙との競争に勝つ手段であるとともに、将来を見据えた販売戦略でもあったことを吐露している。

朝日新聞は小学生新聞を持たぬから、毎日新聞でこれをはじめたら、恐らく小学生はよろこんで読んでくれるだろう。小学生新聞を読んでくれること自体もいいことだし、やがて小学生が大きくなったらきっと毎日新聞の読者になってくれるだろう。小学生新聞はどうしても出さなければならぬ⁵¹

朝日新聞社の子供関連企画

「朝日デー・子供大会」が開催された1922年から1924年にかけては、朝日新聞社の子供関係企画の転機だった。1922年1月1日には、前年末に予告されていた通り⁵²『東京朝日新聞』朝刊第一面に「コドモ（ノ）ページ」が掲載され、同年2月25日に創刊されたばかりの『旬刊朝日』（1922年4月2日第五号から『週刊朝日』⁵³）の第二号（3月5日発行）で「コドモの

⁵⁰ 社史編纂委員会編『毎日新聞七十年』（毎日新聞社、1952年、550-553頁）、毎日新聞百年史刊行委員会編『毎日新聞百年史：1872-1972』（毎日新聞社、1972年、297-298頁）。

⁵¹ 鹿倉は出張先の大連で見た『満州日日新聞』の附録の小学生新聞にヒントを得て創刊したという。朝日新聞も同様の企画を準備していたが、毎日に先行されたので取り止めとなった（『毎日新聞七十年』550-551頁。引用は551頁）。

⁵² 「懸賞募集の子供の顔、子供の読物、漫画、写真等奇想天外の趣向に充てる子供本位の面白い頁を御覧に供へます」（「新年初頭の本紙」『東京朝日新聞』1921年12月29日・30日第三面）。

世界」欄の掲載が始まり、同年9月15日には『週刊朝日』の秋季特別号が「婦人とこども」をテーマに出版されており⁵⁴、翌1923年に創刊された『アサヒグラフ』（当初日刊）にも、創刊時より毎週日曜に写真と漫画から成る4ページ分の「コドモページ」が掲載されている。また、同じく『アサヒグラフ』第一号（1923年1月25日）から連載されていた「正チャンのぼうけん」は、関東大震災後は題を「正チャンノパウケン」に改め、舞台を『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』の朝刊第三面に移し継続され、後に単行本『正チャンの冒険』（1924-25年）も刊行された。1923年12月1日には『週刊朝日』の「コドモページ」をもとに幼児向け月刊絵雑誌『コドモアサヒ』が創刊され⁵⁵、1924年1月6日号からは『週刊朝日』の「コドモページ」が拡張されている。震災後週刊となっていた『アサヒグラフ』も、同年1月2日号から子供の写真を掲載した連載企画「紙上こども展覧会」を開始した。

『旬刊朝日』（『週刊朝日』）創刊時の朝日新聞社出版部長・鎌田敬四郎は、1923年5月に開かれた販売店の会合「関西朝日会」の席上で、『週刊朝日』刊行の目的の一つを、「一週間一冊これを手にしておれば、居ながらにして内外の主なる事件を知悉し得」るようにするためと述べたうえで、もう一つの刊行目的を、次のように説明している。

次に本誌の目的とする他の一半は、世人に向って生活上の実益と慰楽とを、また男女、子供の善良にして興味深き読物を提供せんとするにあります。すなわち、毎号一流の大家の名論や有名作家の小説、家庭主婦の参考とすべき記事、男女小学生の心意を開発誘導する記事、絵画などを掲載し

⁵³ 創刊号は新聞半ページ大に近い四六4倍判、表紙とも36頁で一部10銭、月極め30銭、送料1銭、毎月5・15・25日の発売で、購読申込が35万部に達し、追加注文が殺到するほどだった。1922年4月2日から大阪毎日新聞が『サンデー毎日』を創刊したため、週刊に変更、『週刊朝日』と改題し、月極め定価は30銭に据え置き、4月12日には出版部を週刊部と改め、東京朝日新聞社も杉村のもとに担当記者を増員した（朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（朝日新聞社、1991年、193-195頁））。

⁵⁴ 「現代に生くる婦人の糧」「それは男子にとつても必読の文字でなくてはならぬ」（『週刊朝日』広告）『東京朝日新聞』1922年8月27日朝刊第三面）。

⁵⁵ 畠山兆子「第11章 大阪朝日新聞社における子どものための文化事業」（津金澤聰廣編著『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年、273頁）。

ているのはこのためであります。(朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』(朝日新聞社、1991年、196頁))

『週刊朝日』のような出版物においても、子供を取り込むことが重要だったのだ。

このようななか、1926年10月に朝日会館が開館し、ここでも子供関連の企画が推進されていく。会館における子供向けの催しは、当初は映画上映が中心だったが、次第に合唱・舞踊・童話劇の公演や講演会なども加わっていき、1928年2月からはほぼ毎月開催されるようになり、同年年末のクリスマス会からはそれまで様々に呼ばれていた子供向け企画の名称が「アサヒコドモの会」に統一された⁵⁶。1931年3月には朝日新聞社会事業団による子供向けの文化教室(「コドモのための芸術日曜学校」)「アサヒ・コドモ・アテネ」が開設され⁵⁷、年末には『アサヒカイカン コドモの本』が創刊される。なお、この年の4月には朝日会館から総合文化雑誌『會館藝術』も創刊されている。1931年は、朝日会館が会館での各種催しと雑誌出版を連動させた文化活動を、大人向けにも子供向けにも開始した年と言えるだろう。

3. 『コドモの本』の変容——文化的・教育的機関誌から全国向け子供雑誌、そして機関グラフ誌へ

文化的・教育的な機関誌として創刊

では、『コドモの本』はどのような出版物だったのだろうか。残念ながら、『コドモの本』創刊号(第1巻第1号、1931年12月)は現在確認できないが、三冊目に当たる1932年4月号(第2巻第2号)の「編輯後記」から、創刊の経緯と創刊号の様子がわかる。

⁵⁶ 1931年度までの活動の一覧は、「コドモの会開催目録」(『會館藝術』1931年12月号、107-110頁)。コドモの会の活動については、山本美紀「戦前の民間ホール主導による子供の趣味教育とネットワーク——ホールの社会的存在意義の自覚と社会へのアプローチ——」(『奈良学園大学紀要』10号、2019年、145-153頁)。

⁵⁷ 当初は音楽部(声楽、器楽、リトミック)のみだったが、後に絵画部も加わった。「朝日新聞社会事業団のコドモのための文化事業」『コドモの本』1934年3月号 27頁。

アサヒカイカン「コドモの本」の創刊号は、昨年のクリスマスのコドモの会（第六十六回）当日に発行した「アサヒ・コドモの会の本」であります。菊判本文二十四頁に関西地方の童話・童謡作家二十五氏の作品を網羅した美しいプレゼント・パンフレットで「…」爾来休刊二ヶ月、想を練った復活後の次輯が前三月号であります。「…」斯うした雑誌を児童教化事業の一つ「コドモの会」の機関誌として、他に率先して発行してゐるのは、おそらく本誌をもつて最初だらうと思ひます。（「編輯後記」『コドモの本』1932年4月号24頁）

アサヒ・コドモの会主催のクリスマス会のパンフレットとして誕生した『コドモの本』は、本文24頁⁵⁸、菊判より少し大きめの月刊誌となつてからは定価十銭、コドモの会参加者には無料だった⁵⁹。分量の上では、300頁ほどあった娯楽性に富んだ『少年倶楽部』『少女画報』などの月刊誌、100頁ほどあった『赤い鳥』のような童話童謡雑誌、小学館の学年別月刊誌には遠く及ばないものの、30-40頁程度のものが多かった『コドモノクニ』『コドモアサヒ』などの絵雑誌や新聞・雑誌の子供向け附録と同程度である。発行所は社団法人 朝日新聞社会事業団 コドモの本編集部、発行者は大阪で長年お伽芝居（子供向けの芝居）の普及に尽力してきた高尾亮雄、編集者は童話作家の高瀬嘉男⁶⁰だった。

1932年4月号の構成から、創刊当初の同誌の傾向を見てみよう。

1932年4月号

・表紙：浅野孟府

⁵⁸ 表紙と広告を入れると、当初の通常号はグラフ欄も含めて28頁。1932年4月号は、これに加えて、特別に写真「グラフ」欄4頁分が増量されている。

⁵⁹ 「編輯後記」には、「本誌は、毎月のアサヒ・コドモの会へ集まる千六百人の児童たちに、無代で配布してをります。」ともあるが、同号巻頭に掲げられた「アサヒ・コドモの会」の説明によれば、「臨時会費（一回限り）金二十銭／小人でも大人でも／六か月分 会費金一円／小人でも大人でも」ということなので、会員か否かにかかわらず、コドモの会参加者には無料提供していたのだらう（『コドモの本』1932年4月号1、24頁）。

⁶⁰ 『コドモの本』1932年5月号から奥付に記載。

- ・表紙裏：「アサヒ・コドモ・アテネ」の案内、「作品を募る」（作品募集案愛）、「アサヒ・コドモの会」について」
- ・1頁（上）：「コドモ・カレンダー」（季節の豆知識、第七十回アサヒ・コドモの会の案内付きカレンダー）（カット付き）
- ・1頁（下）：「目次」
- ・2頁：曲譜「肉弾三勇士の歌」 本社懸賞一等当選歌
- ・3頁：青柳花明 童詩「ドロツプ」（カット付き）
- ・4-5頁：小川未明（文）、和田徹郎（挿絵） 童話「かうしてお友達となりました」
- ・5頁：アダムソン画 漫画「コーヒがわくまで」
- ・6頁：村井武生 オモチヤの頁「お人形の作り方（2） 動く魚」（カット付き）
- ・7-8頁：澁川繁麿（文、挿絵） 花祭の話「箒一本から」
- ・9-11頁：藤木九三（文）、田川勤次（挿絵） 山の童話「チロールの巨人」
- ・10-12頁（下）：大阪市北大江尋常小学校長 長野隆義「子供の眼！！」
- ・グラフ（一）（実質13頁目）：「アサヒ・コドモのグラフ」（「三月二十日の集り」朝日会館）（写真5枚付き）
- ・グラフ（二-三）（実質14-15頁目）：「コドモと春」（写真9枚付き）
- ・グラフ（四）（実質16頁目）：エヌ・ウシヤコーワヤ画（文も）サウエートの絵本「たべ方」
- ・13-14頁：後藤砂逗「春の野の草」（カット付き）
- ・13-14頁（下）：水上生「コドモのレコード」
- ・15頁：「コドモの新聞」（「東京を知らぬ子ども」、「高くなった富士山」、「富士山に無線電信」、「チャプリン来る」、「世界一の亀が死んだ」〔世界一高齢と思われる亀がロンドン動物園で死亡〕、「廟行鎮のそら豆」〔三島通陽子爵が三勇士爆死現場近くに生えていたそら豆を持ち帰って全国の少年団に配る〕、「万国婦人子供博覧会」〔東京上野で昭和八年開催予定〕）（写真1枚付き）
- ・16-17頁：オクノ・ヒサエ（文）、小谷良徳（挿絵） 童話「セクラベ」
- ・17頁：和田徹郎 漫画「パチンコ」
- ・18-19頁（上）：コドモの映画「ジムミイ」（ゴーモン・フランス社の「ジムミイとお爺さん」）（写真2枚付き）

- ・ 18-19 頁（下）：映画の話「ミツキーマウスが出来るまで」（カット付き）
- ・ 20 頁：箕輪勝太 手工遊戯「たやすく出来る玩具 猿の綱登り」（カット付き）
- ・ 21-22 頁：「綴方」（5 名全員大阪）（カット付き）
- ・ 22 頁：編集部「綴方選評」
- ・ 22 頁：古家新「自由画選評」（自由画作品は 21-22 頁だけではなく、様々な頁に散らばっている。8 名全て大阪）
- ・ 23 頁：平井房人 つなぎ絵「これは大へん」
- ・ 23 頁：「児童に関する雑誌・良書推薦」
- ・ 24 頁：亮〔おそらく高尾亮雄〕「アサヒ・コドモ会館」（三月のアサヒ・コドモ・アテネとアサヒ・コドモの会の活動を紹介）
- ・ 24 頁「編輯後記」
- ・ 裏表紙裏：広告（「食後に食べるメガネのお菓子 ボン・アペチイ」眼鏡肝油本舗 伊藤千太郎）
- ・ 裏表紙：広告（メガネ肝油球 眼鏡肝油 発売元 伊藤千太郎商会 大阪・道修町）

「機関誌」というだけあり、「コドモの会」「コドモ・アテネ」のような大阪・朝日会館で行われていた活動の記事が掲載されているが（表表紙裏、グラフ「アサヒ・コドモの集り」、「アサヒ・コドモ会館」）、それほど多くはない。新聞をはじめ朝日新聞社の他の出版物と連動している企画もある。たとえばこの号では、「肉弾三勇士の歌」の「曲譜」が歌詞付きで掲載されている。これは、1932 年 2 月 22 日に第一次上海事変で敵陣を突破して自爆した三名の一等兵をたたえ⁶¹、朝日新聞社が 2 月 28 日から新聞紙上で全国的に歌詞を募集したメディア・イベントだった。3 月 10 日の締め切りまでに 12 万 4000 通の応募が集まり、この中から一等を一名、二等を二名選出し 3 月

⁶¹ この三人の「英雄」（『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』では「爆弾三勇士」）は、すぐさま、絵画、映画、演劇などに取り入れられ、一種のブームとして消費された。言わばメディア・ミックスのような展開については、「奉納画になる鮮烈な最期」『東京朝日新聞』1932 年 2 月 27 日第七面、「興行界を挙げて 三勇士時代 銀幕に舞台に」『東京朝日新聞』1932 年 3 月 3 日第七面、「勇壮なレビュー『世界に告ぐ』 爆弾三勇士も織り込んで 松竹楽劇部」『東京朝日新聞』1932 年 3 月 3 日第九面などを参照。

15日の新聞紙上で発表、コロムビア・レコードによるレコード化に向け、一等に山田耕筰、二等に古賀政男の曲を付けて、3月17日に東京朝日新聞社講堂における発表演奏会で発表されたばかりのものが、4月5日発行の『コドモの本』に掲載されたことになる。このほかにも、健康優良児表彰、年末の同情週間、忠犬ハチ公など、「本社」によるメディア・イベントは『コドモの本』にしばしば取り上げられており、同誌が新聞の販促的な役割も果たしていたことがわかる⁶²。

『コドモの本』の大半にあたる19頁ほどは、様々な読み物に充てられている。当該の号には、感性に訴える創作作品（童詩「ドロップ」、童話「かうしてお友達となりました」、山の童話「チロールの巨人」、サウエートの絵本「たべ方」、童話「セクラベ」、知的好奇心を刺激する読み物（花祭の話「第一本から」、「春の野の草」、映画の話「ミツキイマウスが出来るまで」、工作作品の作り方（オモチヤの頁「動く魚」、手工遊戯「猿の綱登り」）のように、当時、中流以上の家庭の子供向けに発行されていた芸術的・教育的な雑誌に含まれていたものと非常に近いコンテンツが多い。全篇カタカナで書かれた童話は、小学校低学年の読者への配慮であろう。そのほぼ全てに挿絵もしくは写真が添えられており、全体的に文字主体ではあるものの、絵雑誌のような趣も備えていた。大衆的な少年少女雑誌に含まれていたような波乱万丈の物語やロマンチックな物語は含まれていない。視覚的な娯楽企画もいくつかあるが（漫画「コーヒがわくまで」⁶³、漫画「パチンコ」、つなぎ絵「これは大へん」）、いずれも文字を一切使わずに絵だけで表現したもので、「のらくろ」のようなストーリー漫画とは異なる趣となっている。ただし、新聞の子供欄、小学生新聞、大衆的な子供向け雑誌に掲載されていたような、子

⁶² 健康優良児童表彰会は、朝日新聞社主催・文部省後援で1930年より毎年開催されていた（高井昌史・古賀篤『健康優良児とその時代：健康というメディア・イベント』青弓社、2008年）。「忠犬ハチ公」は、1932年10月4日『東京朝日新聞』第八面掲載の記事「いとしや老犬物語 今は世になき主人の帰りを待ち兼ねる七年間」以降の一連の報道で話題を呼び、銅像の設置と映画化（1934年）、小学校教科書への採用（1934-1935年）へと展開していった、朝日新聞社による一種のメディア・イベントだった。同情週間については、後述。

⁶³ これは、後述するように、『アサヒグラフ』に連載されていた「アダムスン」で、1933年5月号以降は「アサヒグラフより転載」と明記されるようになる。

供向けのニュース記事や情報記事（「コドモの新聞」、「コドモのレコード」、「コドモの映画」）もあり、硬くなり過ぎないような工夫も見られる。

芸術的な創作と知的な読み物を重視する姿勢には、編集者・高瀬嘉男の娯楽観が響いている。高瀬は、朝日会館が「プチブル以上」の「インテリゲンツィア」に与えている娯楽を、漫才・浪花節・安来節・大衆向き映画・髭ものの芝居など労働者が好む「安易な慰安」「民衆娯楽」とも、また、ダンス・ホールやナイト・クラブのような「近時ます〜」感覚的に、より感能的に、煽情的に、猟奇的に」なっている「都会人の刺戟過多の性情に適はしい娯楽」とも異なる、「比較的高級な内容」の娯楽と考えていた⁶⁴。おそらく、高瀬は、庶民的な赤本とも『少年倶楽部』のような娯乐的・大衆的な商業雑誌とも異なる、芸術的・知的に「高級」な雑誌として、『コドモの本』を編んでいたと思われる。この方針は、既存の子供向け雑誌に異を唱えていた倉橋惣三の考え方に近い。倉橋は、1933年に発表した新聞記事で、「絵柄、色彩印刷の粗野下品な」「赤本そのまゝの幼年雑誌」や、教訓や知識が勝っていたり画家の工夫が凝り過ぎていたりして「肝腎の子どもが置き去りにされる」幼年雑誌、「小説的読み物が中心になり過ぎ」ている少年少女雑誌を批判している⁶⁵。

芸術性と教育性を重視する傾向は、執筆陣からもうかがわれる。1932年4月号の執筆者は、1925年に早大童話会を創立、1926年以降は、童話創作に専念していた小川未明⁶⁶、光明寺住職で『日曜教団』『ルンビニ』などの仏教系児童雑誌に童話や絵などを寄せ、『仏教童話全集』全15巻（鴻盟社、1928-29年）刊行にも携わっていた澁川繁麿、「幼稚園の保姆」で「新進の閨秀童話作家」⁶⁷奥野壽枝、朝日新聞社社員で岩登りの登山家として著名だった藤木九三、群馬・東壽寺の住職で同人誌『桑の実』を刊行していた童謡詩人の青柳花明⁶⁸、人形小劇場を創設し朝日会館や大毎講堂で上演、1931

⁶⁴ 高瀬嘉男「朝日会館を通じて見た近代大阪の娯楽性」『大大阪』第7巻第10号 1931年10月 59-63頁（引用は59、60、61頁）。

⁶⁵ 倉橋惣三「雑誌界この一年 現状と希望／幼少年雑誌について」『東京朝日新聞』1933年12月29日第六面。

⁶⁶ 以下、特に注記しない限り、児童文学・童画関係の人物については日本児童文学会編『児童文学事典』（東京書籍、1988年）を参照。

⁶⁷ 「編輯後記」『コドモの本』1932年4月号 24頁。

年には宝塚人形劇場を創設していた詩人・村井武生⁶⁹、大阪市北大江尋常小学校長・長野隆義というラインナップだった。創刊号に引き続き関西の童話・童謡作家が多く、小川未明と青柳花明以外は、いずれも関西や朝日新聞社に縁の深い人物である。画家もやはり、関西出身者や関西で活躍していた者、既に朝日新聞社と関りがあった者が多い。表紙は、1930年から大阪に移住し1931年に大阪プロレタリア美術研究所を設立して活躍していた前衛彫刻家の浅野孟府⁷⁰が担当し、カットと挿絵は、信濃橋洋画研究所（1931年より中之島洋画研究所）に学び大阪プロレタリア美術研究所創立に関わった小谷良徳⁷¹、1926年に春陽展で入選し1931年に新興美術協会創立に参加した田川勤次⁷²、関東大震災を機に関西に移住、宝塚少女歌劇談美術部に入り機関誌『歌劇』編集部員として表紙絵・挿絵など描いていた漫画家の平井房人⁷³らが描いていた⁷⁴。

⁶⁸ 畑中圭一「第三章 地方の童謡運動」『文芸としての童謡：童謡の歩みを考える』世界思想社 1997年 171-182頁。

⁶⁹ 1929年にL・L・L玩具製作所（所長・佐藤春夫）を創設したのち、1930年に大阪に移住している。滝口征士『村井武生（詩人・人形劇研究家）年譜表』増補版 ふるさと資料普及会 1993年。

⁷⁰ 以下、特に注記しない限り、画家・版画家に関しては、東京文化財研究所の『日本美術年鑑』に掲載された物故者記事を網羅した「物故者記事」データベース（<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko>）を参照 <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko>）を参照（2021年12月1日最終アクセス）。

⁷¹ 「小谷良徳年譜」『小谷良徳画集』時の美術社 1979年。

⁷² 鳴澤成泰（中之島図書館）「中之島図書館所蔵の絵画について」『大阪府立図書館紀要』37号 2008年3月 13頁。

⁷³ のち1938年に『大阪朝日新聞』に3コマ漫画「思ひつき夫人」を連載し評判となった。三木哲夫「平井房人」岩切信一郎ほか編著『近代日本版画家名覧（1900-1945）』版画堂 2013年（オンラインPDF版）73頁。

⁷⁴ この他、松田三郎も『コドモの本』にかかわっていた。松田三郎は『コドモアサヒ』にも挿絵を描いていたということしかわからないが、「編輯後記」に「挿絵家の小谷良徳、和田徹郎、田月勤次、松田三郎、平井房人の諸氏はそれぞれ二科、春陽会その他の団体に所属する有名な方々」とあることから、中央美術展（1922年）・二科展（1923年）・春陽会（1924年）に入賞し、1932年に春陽会賞を受賞、後に春陽会会長となった倉田三郎が、妻（松田光子）の姓で子供向け雑誌に絵を寄せていたのかもしれない。同様に、和田徹郎も画家の変名の可能性が考えられる。倉田三郎については、「年譜・文献目録」府中市企画調整部美術館担当 編『倉田三郎展：府中市第14

大人向けのコンテンツも掲載されていた。教育者や各界の著名人が著した子供・家庭・教育にまつわるエッセイは、「父兄のページ」「母へのページ」などの題で創刊当初より1934年1月号まで掲載されている。子供向けもしくは子供に関する親向けの書物を紹介する欄もほぼ毎号掲載されていた⁷⁵。当該の号の「児童に関する雑誌・良書推薦」では、『コドモノクニ』『子供之友』『赤い鳥』などの子供向け雑誌や、『童話研究』『子供之世紀』『母性愛』のような大人向けの雑誌、『基督教家庭新聞』『日曜学校の友』『日曜学校』『基督教世界』など子供向けや家庭向けのコンテンツを含むクリスチャン系の雑誌が推薦されており、ここからも、『コドモの本』がどのような階層を対象とし、いかなる方針で編纂されていたのかがうかがわれる。他に、『週刊朝日』（「毎号「少年少女の読物」の頁掲載」）、『婦人』（「毎月コドモの読物満載」）、『コドモアサヒ』（「毎号童画と童話と童謡のトリオになるユニークな編輯」）といった朝日新聞社の刊行物も紹介されており、『コドモの本』の販促誌としての側面を垣間見させている。

子供の作品の投稿企画もあり（「綴方」「自由画」、のち「コドモの作品」に統合）、毎号、作文・詩・絵など児童の作品が学校名・学年と名前付きで掲載されていた。投稿者はほぼ全員小学生で⁷⁶、畠山桃子が指摘しているように、『コドモの本』が小学生向けとして編集されていたことが確認できる⁷⁷。大阪市内の小学校教員に依頼して「綴方」への作品を募集した前月号⁷⁸に引き続き、「綴方」も「自由画」も全て大阪の小学校からの投稿と

回企画美術展』府中市 1994年 52-69頁参照。当時は女性向けや子供向けの媒体の挿絵や表紙を担当する際に、特別なペンネームを用いる画家が少なくなかった。たとえば、1927年に二科展に入賞、1935年には二科展で推薦賞を受賞していた洋画家の宮本三郎は、『主婦之友』の表紙絵を奥澤二郎名義で担当している（1937年1月号～38年12月号、40年7月号～41年12月号）。主婦の友社編『主婦の友の五十年』主婦の友社、1967年、26-17、227頁。

⁷⁵ この欄は、その後「よい本と雑誌」と名前を変え、本文に組み込まれた形では1935年3月号（もしくは欠号の同年4月号）まで、1935年5月号・7月号では（6月号欠号）附録の大人向けの『家庭の本』内に、掲載され続けた。

⁷⁶ 1932年3月号（月刊第一号）の自由画には幼稚園児の作品も見られるが、その後はほぼ全員小学生の作品が掲載されている。

⁷⁷ これに対して、『コドモアサヒ』は幼児向けだった。畠山前掲論文（1996年）273頁。

⁷⁸ 「市内の各小学校の先生方に本誌創刊号のために、みなさんの綴方をお願いしました

なっている。これらには、選者による選評が付いていた（編集部「綴方選評」、古家新「自由画選評」）。「編輯後記」にもあったように、『コドモの本』は「児童教化事業」たる「コドモの会」の機関誌だった。つまり、子供はあくまでも「教化」の対象であり、誌面作成に直接参加するわけではなかったものの、子供が参加できる余地は設けられていたのだ。「童話、対話」の投稿も募られていたが、これには子供だけではなく大人も投稿することができた⁷⁹。投稿者は当初は大阪を中心とする関西圏中心だったが、「地方の小さな愛読者たちの手からも、どしどし秀れた作品をお送りくださることを切に望んで居ります」と1932年4月号の「編輯後記」が訴えてからは次第に関西圏以外からの投稿が増え⁸⁰、1932年10月号からは東京からの投稿も見られるようになる⁸¹。広告は、1933年6月号（もしくは欠号の7月号）までは裏表紙と裏表紙裏を合わせて2頁で眼鏡肝油（伊藤千太郎商会）のみの掲載だったが、1933年8月号からは阪和電鉄や大阪三越・大阪大丸などの百貨店の広告が掲載されるようになる。

このように、草創期の『コドモの本』は、豊富な芸術的・教育的なコンテンツに、新聞や大衆的な雑誌に見られるような子供向けのニュース記事とコドモの会の情報が加わった独特なものとなっており、新聞社の販促物としての側面を有しつつも、内容的にはそれ以上の出版物となっていた。

「うつくしい おもしろい ためになる」——全国向け子供雑誌に

大阪・朝日会館の「コドモの会」の活動を越えた子供向け雑誌としての『コドモの本』の特色は、表紙のタイトルの上に「うつくしい おもしろい」

ら、たちまち六百五十三編集りました。」編集部「綴方選評」『コドモの本』1932年3月号24頁。

⁷⁹ 「作品を募る」『コドモの本』1932年3月号24頁、1932年4月号表表紙裏など。大人からの投稿の募集は、現存する資料では1933年2月号まで確認できる。

⁸⁰ 『コドモの本』1932年8月号の「コドモの作品」（綴方）に掲載された4編のうち2編が佐世保市から寄せられている（23頁）。

⁸¹ 1932年10月号に掲載された4編の綴方（「子どもの作品」）のうち1編は東京渋谷大向校から寄せられたものだった。ただし、自由画については、1932年3月号掲載のものには「女師附属幼」「東京大森幼」が含まれていたものの、その後は基本的に大阪市内の小学生からの投稿となっている。

という謳い文句が印刷されるようになった1932年10月号あたりから、次第に強まっていった。1932年9月号からは、同年6月に創立された東京朝日こどもの会の活動の様子を扱った記事も掲載され始めている。

1933年1月号からは謳い文句が「うつくしい おもしろい ためになる」に変わるとともに、「大阪朝日新聞社・朝日会館内 アサヒ・コドモの会」「東京朝日新聞社・朝日講堂内 朝日こどもの会」と表紙に併記され、巻頭の「カレンダー」には大阪の他に東京の会の予定も記載されるようになる。その一方で、読み物の量が増え、誌面に取り上げられる内容も寄稿者・投稿者の範囲も地域的・分野的に徐々に広がり、投稿も遠方から寄せられたものが増えていく。また、1932年10月号には、「コドモ・アテネ」でリトミック特別講習会を開いた縁もあり、日本におけるリトミック教育の第一人者・小林宗作の弟子であった東京成城学園の奥壽儀による「コドモ・アテネのみなさんへ」という一文が掲載されていたが、これ以降、関西に限らず、東京をはじめ他の地域の教育関係者や著名人からの随想および教育的・啓蒙的な文章も載せられるようになっていった。

例として、1933年8月号の誌面構成を見てみよう。

1933年8月号

- ・表紙：櫻井悦「海と遊ぶ子ども」
- ・表表紙裏：「アサヒ・コドモのグラフ」（「第八十六回 アサヒ・コドモの会（大阪・朝日会館）」）（写真5枚付き）
- ・1頁：「コドモのカレンダー」（アサヒ・コドモ・アテネとアサヒ・コドモの会の予定、「夏休み中の皆さんの心得」や季節の豆知識など）（写真1枚、武井武雄のカット1枚付き）
- ・2-3頁：巖谷小波（文） 国枝金三（絵）童話「ゆめの龍宮」
- ・4頁：長谷川時雨 母へのページ「生活の朝」
- ・4頁：上田憲司 シルエット「ハアゲンバック・サアカス」
- ・5頁：京都帝国大学理学部 理学博士・農工学士 田中宗愛 科学よみもの「高山登り」（カットと写真1枚付き）
- ・6-7頁：東京帝国大学助教授 日本航空研究所員 小川太一郎 科学知識「飛行機の世界一づくり」（写真2枚付き）
- ・8頁：「コドモの作品」（綴方：東京1、大阪・難波1、愛媛1；自由画3つ

とも全て大阪)

- ・ 8 頁：「自由画選評」
- ・ 9 頁：高尾亮雄「東京と大阪の日本一健康優良児童表彰お祝ひの会」(写真5枚付き)
- ・ 9 頁：「九月号の主なる読物」(「童話」「童謡」「科学」に分けて紹介)
- ・ 10-11 頁(上)：アンネ・ゲイジ(文)、上田清市(絵) 童話「をかしなスイカ男(2)」
- ・ 10-11 頁(下)：大阪帝国大学助教授 梶原三郎 衛生小学(2)「生物の始め」(カット付き)
- ・ 11 頁：生田花世(作) 童謡「木のぼり」(カット付き)
- ・ 12-13 頁：「コドモ・グラフ」(アメリカ3、イタリア1、メキシコ1、フランス1、海外〔撮影地不明〕3)(写真9枚付き)
- ・ 14-15 頁(上)：大阪商船長城丸無電局長 平野利一 科学よみもの「龍巻」(カット付き)
- ・ 14-15 頁(下)：安泰 マングワイソツプ「カヘルトウシ」
- ・ 14-15 頁：興田準一 童話「ウゴクカゲ」(カット付き)
- ・ 16 頁：「コドモの新聞」(アンドラ1、スエーデン1、ポーランド1、日本6〔大阪1、神奈川1、愛知1、東京1、和歌山1、満蒙学術調査団1〕)(写真5枚付き)
- ・ 17 頁(上)：関西大学教授 中村良之助 コドモの世界めぐり(6)「ゼネバの風景」(写真2枚付き)
- ・ 17 頁(下)：大阪略画研究会長 小野田伊久馬 略画のお手本「船の描き方」
- ・ 18 頁：村上鶴子訳(カアアルトン・ウオツシユバア、ヘルイズ・ウオツシユバア、フレデリック・リイド) 科学よみもの「ダアウィン物語」(カット付き)
- ・ 19-20 頁：能勢登羅(訳)、ヴェ・マヤコフスキー(文)、エヌ・ウシヤークワ(絵) サウエートの絵本「なまけもののウラス(1)」
- ・ 22-23 頁：鳴海要吉(文)、田村富貴子(絵) 童話「モーコといふ鬼」
- ・ 22-23 頁(下)：「よい本とごつし」
- ・ 23 頁(上)：「アダムスンの漫画」(アサヒ・グラフより転載)
- ・ 24 頁：長尾豊(作)、桜井悦(絵) 童謡「夜の海」

- ・ 24 頁：「目次」
- ・ 24 頁：「みなさんの作品を募ります」（作品募集）
- ・ 24 頁：「編輯だより」（カット付き）
- ・ 裏表紙裏：広告（武田商店「ポリタミン」、あべの橋 阪和電鉄「海水浴は「週聞朝日」後援 阪和濱寺へ」「ラヂオ体操実演指導 主催 大阪通信局及JOBK」）
- ・ 裏表紙：広告（「みつこし（おほさか）」）

目次が巻頭から巻末に移動し、自由画が綴方（作文）作品とともに一か所にまとめられ、綴方に対する選評が無くなった以外、全体的な体裁は以前とそれほど変わらないが、一般的に機関誌としての趣が後退している。童謡・童話など芸術作品と知的な読み物の数がほぼ倍増した⁸²ことにより、朝日新聞社およびコドモの会関連の記事⁸³の割合が激減しているのだ。朝日新聞社関連・コドモの会関連の記事は、1932 年 4 月号では 5 頁分あったのが、1933 年 8 月号では 2 頁にすぎない。これはこの号のみに限られる傾向ではなく、1932 年後半以降、顕著になってきたものだった。全ての創作作品や読み物には挿絵もしくは写真が付いていたので、コドモの会の機関誌というよりも、子供向けの挿絵付き読み物雑誌としての性格が強くなったと言えるだろう。読みもの雑誌としての性格は、1933 年度の掲載作一覧「何の話は何処に？」⁸⁴が 1934 年 1 月号から時折掲載されたことにも示されている。

誌面における海外の香りも強くなってきている。『アサヒグラフ』から転載された「アダムソンの漫画」⁸⁵は以前から掲載されていたが、それ以外に

⁸² 童話・絵本 5、童謡 2、科学・地理に関する読み物 6。前年の 1932 年 4 月号では、童話・絵本 2、宗教・科学・技術に関する読み物 3、童謡（童詩）1。

⁸³ コドモ活動関連記事 2（うち 1 つは大阪のみ）、朝日新聞社関係 1。1932 年 4 月号では、コドモ活動関連記事 5（全て大阪のもの）、朝日新聞社関係 1。

⁸⁴ 「表紙」「童話」「童謡」「科学」「世界偉人伝」「伝説」「サウエートの絵本」「父母へのページ」「漫画」「その他」に分けて記載されている。現存の資料では、1934 年 1 月号、2 月号、3 月号、9 月号、12 月号に掲載が確認できる。

⁸⁵ スウェーデンのオスカー・ヤコブソン（Oscar Jacobsson）のコミック・ストリップで、セリフが無いこともあり、欧米各地の新聞に掲載され、人気を博した。https://www.lambiek.net/artists/j/jacobsson_oscar.htm（最終アクセス 2021 年 12 月 1 日）

も海外の作品や海外の話題を扱ったコンテンツが増えているのだ。童話・絵本のうち半数の2本、知的な読み物のうちの1本（科学よみもの「ダアウイン物語」⁸⁶）は海外の作品の翻訳である。同様に、「コドモ・グラフ」「コドモの新聞」では、以前は日本の話題を中心的に扱っていたのが⁸⁷、当該の号では、「コドモ・グラフ」の全ての話題が海外（欧米）のもので、「コドモの新聞」でも日本の話題は半分にとどまっている。誌面で扱われる「海外」は欧米と「サウエート」が多いが、「満州」「南洋」など地政学的に日本との関係が重視されていた地域を中心に非欧米圏の話題も時折扱われており⁸⁸、子供の目を世界に向けさせようという編集部の意向が感じられる。

この他のコンテンツでも、できるだけ大阪・関西の話題や投稿に偏らないようにしようという工夫が見られる。たとえば、この号の「コドモの新聞」では、大阪、神奈川、愛知、東京、和歌山の話題が取り上げられており、また、コドモ会で開催された全国健康優良児童表彰会の表彰式の様子も、東京のものと大阪のものの両方が写真付きで報じられている。この他の号でも、1933年2月号から1934年11月号までは、ほぼ毎号で東京の会の活動に関する記事が多くの場合写真付きで掲載されていた（巻末一覧参照）。投稿欄にも同様の配慮が垣間見られる。自由画の掲載作品は常に大阪からの投稿となっていたが、綴方（作文）のほうは全国各地から寄せられており、この

⁸⁶ おそらく、アメリカの教育改革家、カールトン・ウォッシュバーン（Carleton Wolsey Washburne）が、Frederic Reedの協力のもと、妻 Heluiz と著した共著 *The Story of the Earth and the Sky* (New York, London: the Century, 1933) の抄訳。ウォッシュバーンは、系統的な知識や技能を学ばせる個別的な学習（共通基本教科）と社会的・想像的な活動を行うグループ活動の両方を重視する教育方法「ウィネトカ・プラン」を創案し、日本の大正期の新教育運動にも影響を与えた。ウォッシュバーンとウィネトカ・プランについては、宮野尚『ウィネトカ・プランにおける教職大学院の成立過程』（風間書房、2021年）。

⁸⁷ たとえば、1932年4月号では、「コドモ・グラフ」で扱われた話題は全て日本、「コドモの新聞」で扱われた話題は、日本のものが6つ、英国（ロンドン）のものが1つだった。

⁸⁸ 「満州国少女使節歓迎コドモの会」の「東京の会」と「大阪の会」（1932年8月号8頁）、「南洋探検の旅」（1933年10月号12-13頁）、「凍つた地をふみしめて元気な満州の兵隊さん」（1934年2月号14-15頁）、「満州国の皇帝」「満州国の子供」（1934年3月号16頁）、「満州国さまざま」（1935年5月号16-17頁）など。

1933年8月号では東京、大阪（難波）、愛媛から選ばれている。1934年以降は遠方からの投稿も増え、南は九州から北は北海道、さらには樺太や朝鮮などの「外地」からも作品が寄せられた⁸⁹。『コドモの本』は各地の図書館、セツルメント、子供のための事業団体、病院などに寄贈されていた⁹⁰。1934年の関西の水害の際には、被害にあった地域の小学校に『コドモの本』を寄贈している⁹¹。送料も記載されているので取り寄せも可能だったと思われるが、おそらくは、販促の意味も込めた慈善事業として各地に寄贈された『コドモの本』を目にして、こうした作品を遠方から送ってきたのだろう。

広告欄は、それまで長らく裏表紙を合わせて2頁だったのが、1933年11月号からは表表紙裏・裏表紙裏・裏表紙を合わせ（以下同）4頁と増え、田村孝之介の絵による絵付録「スポーツ動物遊び双六」が付き本文が25頁に微増した1934年1月号では、9頁分が広告に充てられた。以降は広告頁の分量が増え（6頁～9頁）、子供・教育・家庭に関する商品・サービスを中心に、扱う品の種類も増えている。1933年11月号に森永キャラメルが掲載されてからは、クラブハミガキ（1934年1月号から）、グリコ（1月号から）、明治ミルクキャラメル（同年2月号から）、明色白粉（同年4月号から）な

⁸⁹ 1934年から35年の『コドモの本』「コドモの作品」欄に掲載された綴方・童謡・短歌・俳句・詩の採用者の在住地は以下の通り（数字は作品数）。鳥取1・静岡1・福島1（1934年1月号21頁）、岡崎1・静岡3・（愛知）瀬戸陶原1（1934年2月号19頁）、岡山1・岡崎1・三重1・福島3・横浜1（1934年3月号15頁）、埼玉1・奈良1・秋田1・静岡1・和歌山1・宮城1（1934年4月号23頁）、鳥取1・樺太1・秋田2（1934年5月号22頁）、和歌山1・長岡1・前橋1・岡山2（1934年6月号22頁）、愛知1・三重1・長崎2・鳥取1（1934年7月号18頁）、新潟1・和歌山1・大分1・鳥取1・函館1（1934年8月号23頁）、奈良1・朝鮮平北3・鳥取1・東京2（1934年9月号16頁）、樺太1・兵庫1・奈良2・鳥取1（1935年11月号16頁）、東京1・兵庫1・鳥取1・和歌山1（1935年12月号19頁）、山梨1・山形1・朝鮮平北2・岡崎1（1935年1月号14頁）、奈良1・福井1・東京2・栃木1・ハルビン1（1935年2月号7頁）、新潟1・咸北羅南1・岡山1・米子1・埼玉1（1935年3月号13頁）、宮崎1・東京1・大阪1・静岡1・和歌山1（1935年5月号12-13頁）、静岡1・富山1・岡山1・岩手1（1935年7月号13頁）。

⁹⁰ 「本誌は毎号、各地図書館、セツルメント、子供の為の事業団体、其他公私立の病院等へたくさん寄贈してをります。」（『コドモの本』1935年5月号24頁）。

⁹¹ 「四恩学園はじめ各小学校へは「コドモの本」をたくさんお贈りいたしました。」（『コドモの本』1934年11月号24頁）。

ど、大手出版社の全国向け雑誌でよく目にするような企業の広告も掲載されていた⁹²。駿々堂出版、創元社など京都・大阪を中心に全国展開していた出版社の広告もある。とは言え、広告の多くは、三越、大丸、そごう、高島屋、松坂屋といった百貨店の大阪店や、大軌・参急電鉄、阪神電車・阪神パーク、大阪商船、南海電車、ヒツジ屋本店（洋服店）、大野病院、三木楽器店（大阪本店・神戸支店）、日本楽器大阪支店（山葉ピアノ）など、依然として大阪を中心とした関西向けのものだった。

執筆陣も幅広い。童話は、児童文学者の草分けで「お伽のおぢさん」（口演童話家）としても知られていた巖谷小波、『赤い鳥』『コドモノクニ』の編集に関わってもいた奥田準一、口語詩人の鳴海要吉が書き、1928年に『女人芸術』を立ち上げていた作家・長谷川時雨が随筆を、『女人芸術』に関わっていた詩人・生田花世と、東京・数寄屋橋にあった日本初の全席椅子席の洋風劇場・有楽座における日曜・祝日の子供日（子供デー）のために脚本を書いていた長尾豊が童謡を、それぞれ寄せている。なお、巖谷小波の童話「ゆめの龍宮」は、1933年9月5日に直腸癌で死去する直前の絶筆と思われる⁹³。また、専門家が寄稿する知識読みものは、大阪・京都・東京の各帝大の教員が執筆している。

出身地や在住地に関係なく、各界で活躍している人物に協力を依頼していたことは、他の号への寄稿者からも見て取れる。1933年後半以降の執筆者を見ると、早大童話会創設に加わり『赤い鳥』に投稿していた童話作家・坪田譲二（1934年8月号）、『コドモノクニ』『幼年倶楽部』に作品を発表し、のちに「かもめの水兵さん」（1937年）で有名になる童謡詩人・武内俊子（1933年11月号）、『赤い鳥』などに作品を発表していた童話作家の北川千代（1933年12月号）、『赤い鳥』に作品を発表し1930年に奥田準一らと童謡・童話雑誌『乳樹（のちチチノキ）』を創刊、のちに「たきび」（1941年）で知られるようになる童謡詩人・巽聖歌（1933年12月号）、森三千代（1933年11月号）や神近市子（1933年12月号）ら『女人芸術』参加者、自

⁹² 森永製菓以外は、大阪発祥で大阪に本社のある企業（中山太陽堂、株式会社江崎、明治製菓、桃谷化粧品研究所）だった。

⁹³ 「お伽の神様で、日本のアンデルセンといはれた巖谷小波先生が、亡くなられました。 […]『コドモの本』8月号に掲載した童話『ゆめの龍宮』は、先生の絶筆になりました。」「おたより」『コドモの本』1933年10月号24頁。

由律俳句の俳人・萩原井泉水（1934年12月号）、哲学者・教育者の安倍能成（1933年11月号）など、新進気鋭の者から既に名声を確立していた者までが『コドモの本』に関わっていた。この他に目を引くものとしては、翻訳家で児童文学者の村岡花子が、1933年9月号に童話「雨の小人」を書いている。村岡は当時、JOAKのラジオ番組「子供の時間」内のコーナー「コドモの新聞」に出演していた。また、北原白秋に師事し『朝鮮民謡集』（1929年）や『朝鮮童謡選』（1933年）を出していた金素雲が、朝鮮童幼協会設立の告知文を1933年11月号に、童話「蟹の学校」を1934年1月号に寄せている。

絵のほうでも、関西圏を中心としつつ多様な画家が携わっていた。1933年8月号で表紙・挿絵を担当している櫻井悦は、女子美術専門学校卒業後に関西女子美術学校講師となり、フランスから帰国して間もない洋画家・小磯良平の指導を受けていた。小磯良平は神戸出身で、朝日会館や『會館藝術』とも関係が深い。櫻井同様、大阪に関わりの深い画家で同号に挿絵を寄せている者には、大阪出身で関西美術院卒業後、1924年に小出栖重らとともに大阪に信濃橋洋画研究所を創立、朝日会館や『會館藝術』の活動に深くかかわっていた国枝金三がいる。上田清市は、神戸出身で古河電気興行に勤務の傍ら画を描き、1931年に第一回独立美術協会展⁹⁴に入選していた上田清一かもしれない。ただし、必ずしも関西出身者や関西で活動していた画家だけが参加していたわけではなく、『コドモノクニ』に創刊時から携わり、「童画」の語が普及するきっかけとなった個展「武井武雄童画展」を1924年に銀座資生堂で開催し、新作玩具作りも行っていた武井武雄⁹⁵や、『コドモノクニ』などに童画を描き、1931年に新ニッポン童画会を設立していた安泰も、挿絵や漫画を描いている。

他の号でも、表紙や挿絵を担当した者には、田村孝之介、高岡徳太郎、小出卓二、鍋井克之など、信濃橋洋画研究所と関りがあり、『週刊朝日』や『會館藝術』にも携わっていた者が多い。櫻井悦、寶角律子、加藤敏子、牧

⁹⁴ 巡回展の大阪会場が朝日会館だった（2月15日～28日開催）。『展覧会開催目録』『會館藝術』1931年12月号、115頁。

⁹⁵ 人形芝居公演にも関心を持ち、「アサヒ・コドモの会と人形芝居」という記事を『會館藝術』1931年12月号40頁に寄せている。

まつ子ら、コドモ・アテネ絵画部に関わっていた女性画家の名も見られる。1928年に朝日会館で個展を開き、戦後『會館藝術』の表紙を担当した吉原治良、画家・古家新（1921年入社）、漫画家・麻生豊（1932年入社）のように、朝日会館や朝日新聞社と関りのあった者もいる。しかし、それだけに限らず、深沢省三・初山滋ら日本童画家協会（1927年創立）の会員達や、文展・二科展で入賞・受賞歴があり1930年に一陽会を結成していた洋画家・鈴木信太郎のように既に名が知られていた者、1928年に春陽会と帝展で入賞し、1932年に日本版画協会会員となったばかりの若き日の棟方志功など、幅広い画家を起用していた。

このように、多彩な執筆陣を抱えていたこの頃の『コドモの本』は、大阪・朝日会館「コドモの会」の機関誌という意味合いを越え、1934年3月号で「わが国唯一のコドモのための優れた大きな雑誌」と自負しているように⁹⁷、全国の子供に向けた文化的・教育的な雑誌という趣の強いものだった。

再び機関誌へ——誌面内外の密接なつながり

読み物中心の文化的・教育的な雑誌としての『コドモの本』は、ほどなく再び変化を見せ始める。コドモの会など子供向けイベント関連の記事が増えるとともに、読者の作品投稿欄と読みものが後退していくのだ。変化のきざしは、1934年4月号が「おたより」欄を「朝日新聞社会事業団の主催するコドモの諸事業の報告や予告のページ」にすると宣言したあたりに見られる⁹⁸。以降、同欄は、編集後記的な位置付けから、コドモの会、コドモ・アテネ（文化教室）、青空の下のコドモ会（遠足など各種フィールドワーク）⁹⁹、関連展示会などの活動の報告と案内の欄に変貌していった。毎号掲

⁹⁷「朝日新聞社会事業団のコドモのための文化事業」『コドモの本』1934年3月号27頁。

⁹⁸「朝日新聞社会事業団の主催するコドモの諸事業の報告や予告のページをつくりました。今までは、「コドモの本」のみのお便りでしたが、これからは、みなさんのお話や御意見ものせますからどしどしお聴かせください」（「おたより」『コドモの本』1934年4月号24頁）；「前月号から編輯だよりや目次を止して、この頁でアサヒ・コドモの会のあらゆる事業についてお知らせすることにしました。」（「おたより」『コドモの本』1934年5月号23頁）。

載されていた作品募集の呼びかけ（「みなさんの作品を募ります」）も、この号を最後に消えている。こうして、しばらくは読み物雑誌としての体裁を保ちつつも、機関誌としての側面が少しずつ強化されていった。

1935 年に入ると、この変化は明白になる。1 月号で古家新による「自由画選評」が無くなり、9 月号（もしくは欠号の 8 月号）からは、綴方・童謡・自由画を掲載していた読者の作品投稿欄（「作品のページ」）そのものが誌面から消えた。他方で、8 月号から表紙絵にアテネ絵画部の子供の会員による作品を用いるようになり¹⁰⁰、見た目の上で大きな変化が生じている。1935 年 9 月号では、美しい絵とともに創刊当初より毎号連載され誌面に彩りを添えてきた「サウエートの絵本」も無い¹⁰¹。代わりに子供関係のニュースやコドモの会の活動に関する写真付き記事が増え、「グラフ雑誌」という色彩が強くなった。さらに、芸術的・教育的な読み物が激減し、1935 年 9 月号以降は記事のほとんどが子供向けの文化活動の紹介・報告に充てられるようになった。1935 年 9 月号からは本文の頁数も 17 頁へと極端に減り（このほか、広告が裏表紙合わせて 5 頁）、目次も無くなる。1935 年 12 月号は本文 16 頁で、広告欄も裏表紙と裏表紙裏のみとなっている。

誌面では数々の催しの予告が行われ、「コドモの会」「コドモ・アテネ」「青空の下のコドモ会」の活動が写真付きで紹介されたり、活動の中で生み出された作品が掲載されたりしていた。箕面公園へのハイキングや六甲山でのキャンプ（以上「青空の下のコドモ会」）、大阪での「舞踊を習ふ会」、大阪・神戸での「絵を習ふ会」などの楽しげな様子は、参加した子供達の写真や作品、詳細なレポートから生き生きと伝わってくる。また、1935 年 12 月

⁹⁹ 「青空の下のコドモ会」は、「昭和七年〔1932 年〕十月創始・毎月 1 回乃至 2 回開催」とされているが（『朝日新聞社会事業団のコドモのための文化事業』『コドモの本』1934 年 3 月号 27 頁）、アサヒ・コドモの会は 1932 年 8 月 5 日にも、三百余人の参加者を天女丸に乗せて淡路洲本へ行く「海上ピクニック」を開催している（『コドモの本』1932 年 1932 年 9 月号表表紙裏）。おそらく、このような不定期の催しが「青空の下のコドモ会」へと発展していったのだろう。

¹⁰⁰ 「前月号の表紙が大さう評判がよかつたので、当分の間アテネ絵画部の作品を表紙にすることにしました。〔…〕」（「おたより」『コドモの本』1935 年 9 月号 16 頁）。

¹⁰¹ 1935 年 8 月号から無くなったのか 9 月号から無くなったのかは、8 月号が欠号のため不明。ただし、1935 年 7 月号「おたより」（26 頁）には、「サーカス」は今月で終りますが、次はナニ？」との記載がある。

号（もしくは欠号の11月号）からは、コドモの会に参加した子供達の感想が、「ファンだより」として掲載されるようになる¹⁰²。これは、大阪・朝日会館での文化活動への参加者達が「会館ファン」と呼ばれていたことを受けている¹⁰³。大人と同じように「ファン」として扱うことは、子供達の参加意欲を刺激したことだろう。誌面内外の活動の密接な結びつき¹⁰⁴と読者の参加意欲の促進は、当時、大手の新聞社・雑誌出版社が行っていたメディアイベントの常套手段だった¹⁰⁵。

親への配慮も細やかになっていく。現存している資料では、1935年5月号と7月号に大人向けの附録『家庭の本』が付けられていたことが確認できる¹⁰⁶。これは、岡本かの子など著名人による随筆、専門家による育児・教育・衛生・子供向け料理などに関する論説記事や実用記事、著名人の親としての意見を尋ねたアンケートの回答、子供に関する（もしくは子供向けの）良書を紹介する「よい本とごっし」など、新聞の家庭欄の家庭教育関連記事に近い内容だった。1935年7月号附録『家庭の本』は「毎月一回一日発行」「第五巻第七号」と記載されていることから、かなり前から『コドモの本』に添付されていたものらしい。

この間、朝日社会事業団による「コドモの会」の活動は各地に広がっていた。既に東京には「朝日こどもの会」が1932年6月に創設され¹⁰⁷、1932年9月号からは活動の様子が記事でも取り上げられるようになり、1933年1月号からは表紙に「大阪朝日新聞社・朝日会館内 アサヒ・コドモの会」に加え「東京朝日新聞社・朝日講堂内 朝日こどもの会」の二つが記されている。

¹⁰²『コドモの本』1935年12月号2、3、14、15頁。

¹⁰³開館五周年を機に著名人から寄せられた声「朝日会館に寄す」で、オペラ歌手の山根千世子が「会館ファン」という言葉を使っているのが早い例だろう（『會館藝術』1931年12月号、22頁）。

¹⁰⁴山本美紀はこれを「幾重にもリンクした構造」として注目している（本書所収の山本論文参照）。

¹⁰⁵佐藤卓己『『キング』の時代』（岩波書店、2002年）、前島志保掲論文（2012年）参照。

¹⁰⁶現在、現物が確認できるのは1935年7月号の分だけだが、1935年5月号表紙には「附録「家庭の本」」との記載がある。

¹⁰⁷「朝日こどもの会（東京）昭和七年六月創始。これは東京朝日新聞社における、アサヒ・コドモの会と同じ催しであります。』（『コドモの本』1933年12月号表表紙裏）。

た。これに続き、1935年4月には神戸と京都にアサヒ・コドモの会が新設されると¹⁰⁸、表紙に記載される都市は、1935年5月号（あるいは欠号の1935年4月号）より「東京・京都・大阪・神戸」の四都市に、1935年7月号より「東京・横浜・京都・大阪・神戸」の五都市に、1935年12月号（もしくは欠号の10月号あるいは11月号）より「東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸」の六都市になっている。1935年5月号からは神戸、1935年9月号には横浜の会の活動も、記事として取り上げられるようになる。

ところがその一方で、『コドモの本』で紹介される子供向けの活動は、関西中心に回帰している。1932年9月号以降、一頁程度を割いてかなり頻繁に紹介されてきた東京の朝日こどもの会の記事が1934年11月号より掲載されなくなり、しばらくは大阪の活動報告だけが掲載されるようになる。1934年12月号からは、巻頭のカレンダーに記載されていた東京の会のイベント予告すら記されなくなった。前述したように、1935年9月号（または欠号の8月号）を最後に投稿欄も無くなったため、遠方の読者の声は誌面に響かなくなった¹⁰⁹。

1935年は広告欄にも変化が見られる。1935年1月号では「森永」など全国展開していた企業の広告が消え、再び関西圏向けの広告が中心となった。また、1月号の広告欄が通常よりも多い10頁、2月号から9月号までは6-8頁¹¹⁰というのは前年通りだったが、朝日会館関係の広告が増えてきている。広告欄が3頁へと激減した1935年12月号では、四分の一頁分が「日本徴兵保険」に充てられている以外は、全てのスペースが朝日会館や朝日新聞社会事業団関係の広告となり、広告面でも「機関誌」という性質が強く押し出された形となった。

この頃の誌面を、1935年9月号を例に見てみよう。

・1935年9月号

¹⁰⁸「神戸アサヒ・コドモの会 京都アサヒ・コドモの会 四月より新設」『コドモの本』1935年9月号表表紙裏。

¹⁰⁹自由画の掲載は続いたが、欄を設けずに誌面に散らすように掲載された自由画3作品は、全て大阪市の小学生からのものだった。

¹¹⁰1935年2月号6頁、1935年3月号8頁、1935年5月号8頁、1935年7月号8頁、1935年9月号6頁。

- ・表紙：(コドモ・アテネ絵画部会員の絵)
- ・表表紙裏(上)：大阪(アサヒ・コドモの会、青空の下のコドモ会)、横浜(朝日コドモ会)、神戸(アサヒ・コドモの会)、京都(アサヒ・コドモの会)の活動予定が記されたカレンダー
- ・表表紙裏(下)：「大阪 朝日新聞社会事業団のコドモのための文化事業」(アサヒ・コドモ・アテネの広告；「神戸アサヒ・コドモ・アテネのことは栄町五丁目大阪朝日新聞社神戸支局へお問合わせ下さい」)
- ・1頁(上)：写真「健やかに」(「町田定明氏撮影(全関西写真展入賞者)」)
- ・1頁(下)：永井善太郎 詩「影ふみ」
- ・2-3頁：「第34・35回 青空の下のコドモ会」(7月21日箕面公園ハイキング、8月17日-18日六甲山キャンピング)(写真16枚付き)
- ・4-5頁：上司小剣、牧まつこ(絵) 童話「ナツミカン」
- ・6-7頁：「アサヒ・コドモの会」(大阪8月4日一朝日会館、神戸8月11日一朝日会堂、横浜8月10・24日一朝日講堂の活動の報告、大阪・神戸・京都・横浜の「九月の催し」の紹介)(写真15枚付き)
- ・8-9頁：「グラフ新聞」(イタリー1、英国1、ドイツ2、アメリカ3、スペイン1)(写真8枚付き)
- ・10-11頁：「ビツクリ写真」(伊勢四日市、鹿児島、淡路島、京都太秦、福岡、京都高野山)(写真6枚付き)
- ・12-13頁：「コドモ夏季講座 絵を習ふ会」(第3回 大阪 8月3日-9日、第1回 神戸 8月10日-16日)(写真22枚付き)
- ・14-15頁(上)：「第7回 コドモ・大人 舞踊を習ふ会 8月14日-20日大阪朝日会館」(写真11枚付き)
- ・14-15頁(下)：「大阪・神戸『絵を習ふ会』の優秀作品」(大阪の作品7名分、神戸の作品8名分の写真付き)
- ・16頁(上)：「三大コドモ夏季講座記念撮影」(大阪「絵を習ふ会」A組、大阪「絵を習ふ会」B・C組、神戸「絵を習ふ会」A組、神戸「絵を習ふ会」B・C組、大阪「舞踊を習ふ会」)(写真5枚付き)
- ・16頁(下)：「おたより」(「◇前月号の表紙が大そう評判がよかつたので、当分の間アテネ絵画部の作品を表紙にすることにしました。今月号は幼稚園の高階経和さん。これも月を追っていい作品をお目にかけられると、思ひます。」)

- ・ 16 頁（下）：「アダムスの漫画 火を消すために（アサヒ・グラフより）」
- ・ 17 頁：「大阪・神戸コドモ夏季講座『絵を習ふ会』作品展 大阪朝日会館と神戸そごうで」（写真 4 枚付き）
- ・ 17 頁（上）：「アサヒ・コドモ・アテネ」の出版目録
- ・ 17 頁（下）：『コドモアサヒ』の広告
- ・ 18 頁：広告（「大軌電車」、「朝日会館パーラーの書籍店」、「三心堂のハブ茶」）
- ・ 19 頁（裏表紙裏）：広告（「田中宋栄堂」、「大軌電鉄」、「日本徴兵保険」、「岩崎大海堂 セメン菓子」）
- ・ 裏表紙：広告（「日本生命（大阪 今橋）」）

一見して分かるように、コンテンツの大部分（9 本、表紙を入れると 10 本）が、コドモの会関連の活動に充てられている。童話・詩といった創作作品は 2 本の掲載にとどまり、7 月号まではあった「科学読本」や専門家による知的な読み物に至っては、全く掲載されていない。1935 年 9 月号「おたより」は、以下のように編集方針の変更を説明している。

前月号でお知らせした通りこの月からコドモの本を一新しました。各地の盛んなコドモの会の様子や青空の下のコドモ会の楽しさをお知らせするために面白い写真を思ひきつてうんとたくさんお目にかけました。／又夏の講習会の写真やその作品集でアサヒ・コドモ・アテネの仕事がどんなにめざましく伸びてゐるかよく解つて下さるでせう。（『コドモの本』1935 年 9 月号 16 頁）

「各地の盛んなコドモの会の様子」と書いてあるが、本文全 16 頁の 68.75%に相当する 11 頁が、大阪と神戸で開催されたコドモ夏季講習と大阪における青空の下のコドモ会の話題で埋められている。横浜と京都のコドモの会の活動にも言及はあるものの、ほんの 2-3 行に過ぎない。7 月号まであった投稿欄「作品のページ」も無く、他の地域の読者の存在はほぼ全く感じられない。9 月号は大阪・神戸で夏の特別講習会が行われた後だったために阪神地域の話題が多かったという事情も考えられるが、横浜の朝日コドモ

会の催しが1本の記事としてまとめられている12月号においても、大阪・京都・神戸のコドモの会の催しの記事と案内は7本に上っており、やはり、京阪神中心に編集されている誌面であることは変わらない。関西以外の地域の子供たちが、土地勘の無い京阪神における活動の報告を読んでその活動を身近に感じたかという、甚だ疑問だ。

1935年9月号には、この他、子供向けの写真ニュース記事が2本掲載されており、うち「グラフ写真」は海外の話題、「ピツクリ写真」は日本の話題を扱っている。「アダムスン漫画」は継続して掲載されているが、コドモの会の活動報告記事が七割近くにのぼっていたこともあり、全般的に日本の話題、それも大阪・神戸のコドモの会の話題で大部分が占められていることになる。1935年9月号には上司小剣、同年12月号には水木京太が童話を書き（10、11月号は欠号）、それぞれに牧まつこと小出卓二¹¹¹が挿絵を描いているが、それ以外は全て写真をふんだんに使った仕様になっている。このため、この号の誌面全体から受ける印象は、新聞の子供向けグラフ附録や『アサヒグラフ』の子供欄に近い。また、これまで『コドモの本』に童話を寄せていたのは、小川未明、巖谷小波、小野牧方、大木雄二、澁澤青花、奥田準一、北山千代のような、もともと子供向けの作品を主に発表していた作家達を中心だったが、1935年9月号と12月号には専ら大人向けの作品に携わっていた作家（小説家の上司、劇作家・演劇評論家の水木）が「童話」を寄せているのも、大きな変化である。

ここにて、『コドモの本』は、全国の子供達に向けた「わが国唯一のコドモのための優れた雑誌」¹¹²であることをやめ、大阪を中心とした関西における朝日新聞社会事業団の子供関連の活動を写真で報じる機関誌となったように見える。

¹¹¹小出卓二は大阪出身の洋画家。大阪信濃橋洋画研究所で学び、1927年第14回二科展に初入賞した。1945年11月には古家新ら二科会員9名とともに行動美術協会を設立している（『日本美術年鑑』1979年271頁）。

¹¹²『コドモの本』1933年12月号表表紙裏

4. 『コドモの本』 から見えてくる「コドモの会」の活動

人事上の変化

このような1934年から1935年にかけての『コドモの本』の変容の直接的なきっかけとしては、大阪・朝日会館における人事上の変化の影響が考えられる。『コドモの本』発行人の高尾亮雄が1934年度で大阪朝日新聞を退職し、1935年3月号（1935年3月1日発行）より発行人が高尾亮雄から高橋増太郎に交代しているのだ。

高尾亮雄（楓蔭）は、『和歌山実業新聞』『大阪日報』などに記者として勤務しながら、関西で子供向けの文化活動に長年携ってきた人物だった。1904年に大阪中之島公会堂で川上音二郎一座のお伽芝居を観て感銘を受け、1906年より自らお伽劇団を結成し1920年頃まで関西の各地で公演するかたわら、北浜にあった大阪初の洋風劇場・帝国座（1910年建設）で川上音二郎一座とともに1913年から翌年にかけて毎週末子供向けの演劇の公演を行った¹¹³。1907年には大阪と京都でお伽倶楽部¹¹⁴を結成し、巖谷小波・久留島

¹¹³「川上音二郎氏が司会者の私が、お伽芝居の日本に生まれた理由、教育的意義を述べ、なお今日の青少年諸君は将来の善良なる大阪市民となるのであるから欧米における観劇客の如く秩序ある節制ある行動をして欲しいと、どこまでもコドモたちを小紳士、小淑女として待遇した。」高尾亮雄「大阪帝国座時代——日本児童演劇史料の一部として——」『大阪お伽芝居事始め』44頁（初出『児童芸術研究』5号、1935年8月号）。高尾自身は、帝国座でのお伽芝居を朝日会館での子供向け文化活動の前身と見ていた（高尾亮雄「大阪のお伽殿堂として 昔の帝国座、今の朝日会館」『會館藝術』1931年6月号6-9頁）。

¹¹⁴「お伽倶楽部」は、1903年に横浜の教会で開いた「お伽講話会」の経験をもとに久留島武彦が1906年に主幹となって創立した、お伽噺（口演童話）を中心に子供のための文化運動の推進を目的とする団体で、京都・大阪・富山など全国各地に波及した。東京では神田の基督教青年会館を会場に毎月「お伽講話会」が開かれ、口演童話のみならず、子供のための様々な演目を盛り込んだプログラムを上演、機関誌『お伽世界』や月刊誌『お伽倶楽部』を刊行した。久留島武彦は、1903年の本郷座における川上音二郎一座による日本初の子供向け劇の実現に巖谷小波とともに協力、1907年には日本初の子供向け劇団「お伽劇団」を組織し、有楽座子供日の催しに尽力したり、東京青山に早蕨幼稚園を創立したりするなど、子供文化運動や幼稚園教育の先駆者として活躍した（「お伽倶楽部」「久留島武彦」日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍1988年）。なお、久留島は関西学院神学部を卒業しているが、関西学院

武彦らとともに子供達を連れて船で別府に行ったり（1910年）東京日光を周遊したり（1911年）する、のちの「青空の下のコドモ会」のさがけとも言える「お伽船」「お伽旅行」の活動も行っている。商業施設と連携した文化活動にも熱心で、1913年に神戸の高等娯楽場である聚楽館の開館に際して館内に設置された演芸練習場で女優養成にあたり、1913年3月、大阪三越百貨店において幹事として橋詰良一（せみ郎）・辻村又男（秋峰）¹¹⁵らとともに「大阪こども研究会」を発足させ、1914年4月の宝塚少女歌劇談第一回公演にも振付として関与している。1919年頃には週刊『小国民新聞』やエスベラント運動にも関わっていたらしい。1921年に日本児童愛護連盟理事となったのち、1923年大阪朝日新聞社計画部に入社。1932年には大阪の口演童話運動の集大成である大阪童話教育研究会を設立し、創立理事となっている¹¹⁶。

出身者は、朝日会館の活動にも大きく関わっていた。

¹¹⁵ 橋詰良一（せみ郎）は、教員生活を経て、大阪毎日新聞社社長・本山彦一が大阪市教育会理事長となった1906年に大阪市教育会主事となり『大阪市教育会報』編集に携わった縁で大阪毎日新聞社に入社し、阪神打出や南海浜寺に海水浴場・海泳連習所を建設、宝塚少女歌劇慈善歌劇会の開催（1914年）、婦人社会見学団の組織（1916年）、屋外で保育を行う「家なき幼稚園」の設立（1922年）など次々と実現させ、退社後も様々な子供向けの文化活動を続けた人物である（畠山兆子「関西児童文化史研究—橋詰せみ郎の障碍と仕事—」『梅花女子大学文化表現学部紀要』11号、2014年、67-77頁）。

辻村又男（秋峰）は、筒井年峰（浮世絵師）門下で絵の手ほどきを受け、1904年大阪で児童美術会を起し、日本初の絵雑誌『お伽絵解こども』を発行、同年朝日新聞大阪本社に入社し、1923年創刊の『コドモアサヒ』の編集を担当、1927年に朝日新聞社社会事業団が創設されると計画部次長となり、子ども博覧会・農繁期託児所助成など少年保護事業に尽力した（「辻村秋峰」日本児童文学会編前掲書、479頁）。畠山兆子は、戦前的大阪では、「子どものため」という大義名分のもと、当時熾烈な販売合戦を繰り返していた大阪毎日新聞社と大阪朝日新聞社の間でも、子供関係の活動では両社が人材交流を行っていた点に注目している（畠山前掲論文、75頁）。なお、『お伽絵解こども』は、大阪で発行された雑誌という点とともに、裏表紙にカラーでオリジナルの意匠広告を掲載するという先駆的試みを行った点でも注目される（「第18章 絵雑誌と情報化社会」、鳥越信編、前掲書、2001年、311-312頁）。

¹¹⁶ 高尾亮雄については以下を参照。堀田穰「高尾亮雄とその仕事」（高尾亮雄著、堀田穰編『大阪お伽居事始め—「うかれ胡弓」回想と台本—』関西児童文化史研究会、1991年、100-126頁）、同「高尾亮雄と女たち—管野スガ・三笠万里子・古屋登世子」

子供向けの劇や音楽を中心とした「アサヒ・コドモの会」と野外への遠足「青空の下のコドモ会」は、高尾亮雄が行ってきた「お伽倶楽部」「お伽船（お伽旅行）」などの活動にその原型を見ることができる。また、『コドモの本』の奥付には当初は発行人の高尾の名前のみが記されている。1934年1月号の絵付録（田村孝之介が絵を担当した大阪・神戸のスポーツ施設を巡る双六）の考案者も高尾だった。このことから、高尾は『コドモの本』の編集にも深く関わっていたと考えられる。退職する頃には、年齢的にも経験的にも朝日会館ではかなりの存在感を示していたようで、1934年11月号『會館藝術』の舞踊を語る座談会では、風邪で体調を崩した中村喜一郎館長に代わって司会を務めている¹¹⁷。コドモの会と『コドモの本』にとって、行動力・企画力と人脈のある高尾の退社は痛手だったことだろう¹¹⁸。

対して、新たに発行人となった高橋増太郎は、もともと記者で報道畑の人間だった¹¹⁹。1923年9月1日の関東大震災の際は、大阪朝日新聞社社会部員として翌9月2日に大阪府・市合同の救援貨物船しかご丸で東京に取材に派遣されている。その後、京都通信局員となり、1929年に朝日新聞社五十周年記念事業の一環として行われた世界新市場調査の際には、特派記者七名のうちの一人として1929年5月24日から11月12日にかけてトルコ・ベルシャ方面に派遣され、現地の様子を同年9月11日から9月17日と10月30

（『京都学園大学人間文化学部』29号、2012年、153-196（44-1）頁）、同「高尾亮雄、伝記上の修正いくつか―『日本エスぺラント運動人名事典』刊行を機に―」（『京都学園大学人間文化学部』32号、2014年、130-111（1-20）頁）。

¹¹⁷「舞踊座談会」『會館藝術』1934年2月号6-14頁。

¹¹⁸朝日会館における高尾亮雄の活動や関心の在りどころを示している記事には、以下のようなものがある。高尾亮雄「唯一のコドモ藝術の殿堂を守れ」〔アサヒ・コドモの会の諸活動、アサヒ・コドモのコラス団について〕『會館藝術』1931年5月号9頁、同「大阪のお伽殿堂として 昔の帝国座、今の朝日会館」〔帝国座のお伽芝居と朝日会館のアサヒ・コドモの会について〕『會館藝術』1931年6月号6-9頁、同「この夏のリトミック講習―模倣から創造へ」〔1927年に朝日新聞社楼上で開催された大阪初のリトミック講座の回想と、1931年夏に朝日会館に小林宗作と石井漠を招いて開催したリトミック講座および舞踊講座について〕『會館藝術』1931年9月号21頁。

¹¹⁹以下、高橋増太郎については、朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（朝日新聞社、1991年、222、326頁）。

日から11月16日の二回の連載記事に発表している¹²⁰。1933年4月より大阪朝日新聞本社計画部に移り朝日会館主事となり、1933年7月号から朝日会館から出されていた総合文化雑誌『會館藝術』の編集長に、1935年10月には朝日会館第二代館長に就任した¹²¹。この流れで、高尾亮雄の退社後に『コドモの本』の発行人となったのだろうが、その後まもなく1936年3月31日で朝日新聞社を退職している。このように、高橋は元記者という経歴と館長在任期間の短さから、朝日会館の活動にそれほど深く関わってはいなかったと思われる¹²²。

とは言え、編集者の高瀬嘉男は続投している。また、先述したように、『コドモの本』の機関誌としての性格は、既に1934年4月号以降、徐々に強められていったものだった。よって、グラフ誌的な機関誌への変容は、高尾の退職がきっかけになったのかもしれないが、より本質的には、編集部が朝日会館における子供向けの活動と誌面の連動をより密にしようと考えた結果ととらえてよいだろう。

「場」との結びつき——地域による活動の違い

『コドモの本』の内容が次第に関西方面の活動の記述に偏っていったのも、誌面と実際の活動を密接に連携させようとした結果と考えられる。冒頭で述べたように、この時代、イベントという「場」と密接に結びついた活動を臨場感をもって全国各地の読者に届け参加を呼びかけるには、そのイベントと同様のイベントが各地で同時開催されている必要があった。しかし、朝日新聞社の子供の会は複数の都市に広がってはいたものの、その活動は地域ごと

¹²⁰「社告／本社五十周年記念 世界新市場視察 特派記者決定」『東京朝日新聞』1929年4月11日第二面、「高橋記者出発」『東京朝日新聞』1929年5月24日第三面、「新市場視察 新興のトルコから（1）～（6）」『東京朝日新聞』1929年9月11日～9月17日第四面、「新興トルコから第二信（1）～（10）」『東京朝日新聞』1929年10月30日～11月16日第四面、「高橋特派員帰朝」『東京朝日新聞』1929年11月12日第四面。

¹²¹十河巖執筆・愛川潔編『朝日会館史』朝日新聞社史編修室、1976年、15頁。

¹²²1933年7月号から『會館藝術』の編集長となっているが、前々から初代編集長・中村喜一郎が宣言した通りに月刊を実現させた以外には、特に大きな試みは行っておらず、同誌への寄稿も1935年10月号の「バクダッド」に限られている。

に異なっていた。

たとえば、大阪では、コドモの会（1926／大正 15 年 10 月創始、毎月 1 回乃至 2 回開催）のほか、文化教室「コドモ・アテネ」（1931 年／昭和 6 年 3 月創始、毎月数回練習）やフィールド・ワーク「青空の下のコドモ会」（昭和 7 年 10 月創始、月 1 回乃至 2 回開催）も開かれていた¹²³。しかし、コドモ・アテネは大阪以外には神戸にしかなく¹²⁴、青空の下のコドモ会の活動も、少なくとも現存の『コドモの本』記載の情報を見る限りでは、大阪以外の地で継続的に開催された形跡は無い¹²⁵。

一方、アサヒ・コドモの会は、大阪・東京¹²⁶・神戸・京都¹²⁷・横浜¹²⁸・名古屋¹²⁹に存在していたが、その活動は地域ごとに異なっていた（巻末一覽参照）。『コドモの本』の誌面情報によれば、大阪のコドモの会では、大人や年長者による子供向けの劇・舞踊・音楽・奇術のパフォーマンスと映画の上映が主な内容となっていた。神戸・京都・横浜の活動も同様のものだった

¹²³「朝日新聞社会事業団のコドモのための文化事業」『コドモの本』1934 年 3 月号 27 頁。

¹²⁴「神戸アサヒ・コドモ・アテネ絵画部（近く開設）」「神戸アサヒ・コドモ・アテネのことは栄町五丁目／大阪朝日新聞社神戸支局へお問合せ下さい」『コドモの本』1935 年 12 月号裏表紙。

¹²⁵東京では、1932 年 8 月 3 日に「第 4 回朝日こどもの会」として「海上こどもの会」が東京朝日新聞社の主催・文部省の後援で開催（『コドモの本』1932 年 9 月号 8 頁）、また、1933 年 8 月 1 日から 4 日まで信州霧ヶ峰への「高原こどもの会」が東京朝日新聞社と東京鉄道局の主催で開催されているが（『コドモの本』1933 年 9 月号 4 頁）、これ以外の同様の催しの記載は、現存の『コドモの本』には無い。大阪の「青空の下のコドモの会」と違い、毎月開かれるような会ではなかったようだ。

¹²⁶東京の「朝日こどもの会」は、1932 年／昭和 7 年 6 月創始、1 回乃至 2 回開催（「朝日新聞社会事業団のコドモのための文化事業」『コドモの本』1934 年 3 月号 27 頁）。

¹²⁷神戸と京都の「コドモの会」は、1935 年／昭和 10 年 4 月創始。神戸は神戸朝日会堂（本社神戸市局の楼上）で、京都は京都朝日会館で開催されていた。「神戸・アサヒ・コドモ会 京都・アサヒ・コドモの会 四月より新設」『コドモの本』1935 年 5 月号 27 頁。

¹²⁸8 月 14・28 日に第 25・6 回「横浜朝日コドモ会」が横浜朝日講堂で開催されるとの記載（『コドモの本』1935 年 7 月号 1 頁）。

¹²⁹1935 年 12 月号（もしくは欠号の 10 号あるいは 11 号）から表紙に名古屋が加わっている。

ようだ。大阪では、さらに、コドモ・アテネの子供達が日頃の練習の成果を舞台で披露してもいた。

これに対して、東京のこどもの会のプログラム構成は劇・舞踊・音楽・映画などで、奇術のような大衆娯楽的なものが少ないという点以外は他の地域のコドモの会の活動と似ているものの、たいていの場合、近隣の小学校や各種の子供向けの文化教室や団体の子供たちが出演しており、大人や年長者によるパフォーマンスはあまり多くない¹³⁰。東京の朝日講堂に独自の文化教室があったわけではなかったの、そこでの活動の発表の場でもなかった。逆に言うと、東京では既に子供向けの文化的・芸術的な教室や団体が多数存在していたため、朝日講堂で独自の文化教室を開く意味が無かったということなのかもしれない¹³¹。ちなみに、1931年5月1日『東京朝日新聞』朝刊第十面「コドモ」欄では、「けふのコドモの集り」として、日本女子大社会事業部主催の「コドモの会」、東京童話会主催の「童話大会」（日比谷公会堂で「童話、童謡、映画の外、石井漠舞踊研究所舞踊部の幼い人達が出演」）、「桃の園子供会」（中野高女講堂で「童謡、童話、遊戯、童話劇等を行ふ」）が紹介されている。東京に様々な子供向けの文化団体があったことが推察される。

とは言え、東京の朝日こどもの会が低調だったわけではなかったようだ。たとえば、『コドモの本』1933年5月号の記事は、「毎回満員」で、「いつもこの会の入場券は、朝日新聞紙上で社告いたしますと、その翌日中に千枚からの切符が売切れますから、新聞で発表しましたらすぐ本社受付でお買ひ求め下さい。」と訴えている¹³²。参加した子供達には、『コドモの本』が無料

¹³⁰1933年2月の第8回だけは次のような理由で、大人や年長者による子供向けのパフォーマンスになっている。「二月は学年試験が間近だし、中等学校入学試験の準備もあることと思はれますので、今回は直接小学校のお子さん達に、出演して頂くことをご遠慮しました。」（『コドモの本』1933年3月号14頁）。なお、『コドモの本』で東京朝日こどもの会関連記事を執筆している生江澤速雄は、茨城県土浦生まれで関西大学を卒業後、通信省貯金課（恩給課決算掛長・調査掛長）に15年勤務したのち、1922年朝日新聞社に入社、社会部・計画部に勤務した（「生江澤本社員」〔計報記事〕『東京朝日新聞』1940年6月5日朝刊第七面）。

¹³¹東京には「朝日こどもの会」発足以前から「子供の会」も複数存在していたようで、『東京朝日新聞』には1909年5月2日朝刊以降、そうした活動の情報が散見する（朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』）。

配布されていた¹³³。

このように、現存する『コドモの本』が発行されていた1931-35年において、朝日新聞社の子供関係の文化活動では大阪・神戸ほど多彩な活動を行っているところは他に無く、また、地域ごとに活動内容も様々だった。このため、活動と密に結びついた誌面にしようとする、いきおい、大阪をはじめとする関西中心の誌面になってしまったのだろう¹³⁴。

朝日新聞社内の東西の連携不足

東京における朝日新聞社関連の子供向けの文化活動が『コドモの本』であまり取り上げられなくなった背景には、『コドモの本』編集部もしくは大阪のアサヒ・コドモの会と東京の朝日こどもの会の連携がうまくいっていなかったという事情もあったようだ。

大阪や神戸の場合は、多くの会が月の上旬に開催されており、また、下旬に開催されたイベントも、編集部の置かれた大阪・朝日会館に近いという地の利もあってか、翌月の『コドモの本』には掲載されていた¹³⁵。したがっ

¹³²『コドモの本』1933年5月号14頁。他にも、「六月の第十一回以来三月目だから、待ちに待った幼い人達は、どしどし押しかけて、開会前既に超満員、立つてみてゐるお子さん方があつたのは御気の毒でした。」(1933年11月号16頁)など、「朝日こどもの会」が盛況だった様子がうかがえる。

¹³³「差し上げた「アサヒコドモの本」三、四月号を見ながら、おとなしく開会を待つて居られました」(『コドモの本』1933年5月号14頁)。「お土産の十月号『コドモの本』」(『コドモの本』1933年12月号11頁)。

¹³⁴なお、当時は、このほかに「場」と結びついたイベント的な活動を全国展開するには、他業種との連携により消費文化と結びつけ、百貨店や映画館など全国展開をしている既存の商業施設と協力して行うというやり方もあった。たとえば、『主婦之友』は、呉服店・百貨店との協力のもと浴衣地柄(デザイン)のコンテストを開き、読者投稿から選出されたデザインを用いた浴衣地(反物)を商品化、これを自社の代理部を通して通信販売したほか、全国各地の百貨店で一斉に展示即売し、この一つ一つの過程を何か月にもわたって誌面で紹介していくという、誌面とリンクさせた読者参加型イベントの全国展開を行っている(前島志保「第4章 消費、主婦、モガ——近代消費文化の誕生と「良い消費者／悪い消費者」の境界について」笠間千浪編著『〈良女〉と〈悪女〉の身体表象』青弓社、2012年、116-198頁)。しかし、『コドモの本』は、消費文化とは一定の距離を保ち、芸術性と教育的な側面を重視していたので、こうした方向には梶を切らなかったのだろう。

て、たとえば2月号の巻頭のカレンダーで開催が予告されたイベントは、2月号が子供達の手元に渡る間に予定通り開催され、その報告が翌3月号にその様子を写した写真とともに掲載される、という一連の流れを観察することができる。これに対して、東京の会はその多くが月の下旬に開催されていたこともあり、記事として掲載されるのは、二ヶ月後となることが少なくなかった¹³⁶。東京の会の出席者は『コドモの本』誌面記事と誌面外のイベントとの連関を強く感じにくかったことだろう。

さらに、東京の会の活動の場合は、日程が決まっていなかったり¹³⁷、予告と実際の活動の日程が異なったりする例も¹³⁸、ままあった。編集部が東京の活動をよく把握していなかったと思われる記述もある。たとえば、1934年2月号9頁には「1月27日」に開催された「第16回 朝日こどもの会」に関する記事があるが、同年5月号には「3月26日」に開催された「第16回 朝日こどもの会」の記事が掲載されている。この年はその後も東京の活動については不可解な記述が続き、1934年3月号1頁で「3月3日 第十八回「朝日こどもの会」(東京)」と予告が出された後に、1934年5月号1頁で再度「5月5日 第十七回「朝日こどもの会」(東京)」との予告が掲載され、実際に後者の記述通り5月5日に「第十七回」が開催されたことが1934年6月号24頁で報告されている(下線前島)。ここから、東京の活動が毎月行われていなかった可能性とともに、東京側と『コドモの本』編集部の連携がうまくいっていなかったことがうかがわれる。

加えて、当時は朝日新聞社内でも東西の違いが大きかった。このことも、大阪・東京におけるコドモの会の活動の違いや『コドモの本』編集部との関

¹³⁵一例をあげると、1932年3月20日に開催された第69回アサヒ・コドモの会(大阪)の様子は、早くも1932年4月号24頁で報告されている。

¹³⁶たとえば、1933年12月17日に開催された第6回朝日こどもの会の記事が1934年2月号16頁に掲載されたり、1934年9月30日開催の第12回朝日こどもの会の記事が1934年11月号に掲載されたりしている。

¹³⁷「X日 第十七回「朝日こどもの会」(東京)」(『コドモの本』1934年2月号1頁)、「日 第十九回『朝日こどもの会』(東京)」(『コドモの本』1934年4月号1頁)など。

¹³⁸たとえば、1934年7月号1頁には「7月7日 第十九回「朝日こどもの会」(東京)」との記載があるが、実際の開催日は1934年7月11日だったことが、1934年8月号24頁・1934年9月号24頁の記述からわかる。

係に影響していたと考えられる。大阪での活動は、朝日新聞社文化事業団により経営されている朝日会館によって主催されていたために、新聞でも告知・報道されてはいたものの¹³⁹、基本的には新聞とは一定の距離を保って行われていた。これに対して、東京におけるコドモの会の活動は、東京朝日新聞社（計画部）¹⁴⁰で主催されていた。『コドモの本』『東京朝日新聞』にも「主催 東京朝日新聞社」と書かれており、「朝日こどもの会の催し」というよりも、「東京朝日新聞社による子供向けの催し」という意味合いが強かったことがうかがわれる。

このことは、東京での催しの『東京朝日新聞』における扱いにもあらわれている。たとえば、1932年8月3日、東京朝日新聞社は、文部省航海練習所練習船の海王丸・日本丸に子供達を乗せて東京・芝浦から横浜まで航海しながら訓練実習・海洋航海作業の見学を行う「海の子供会」を開催した。『東京朝日新聞』が1932年7月24日朝刊で参加募集をかけると、ただちに応募が殺到したようで、7月26日夕刊には「満員になりました」という、募集締め切りの告知が掲載されている。船上の子供達が原稿用紙に書いた手紙を新聞社の伝書鳩を使って本社に送り、それを速達で各家庭に子供達の帰宅前に届けるというサービスの付いたこの催しの様子は、8月2日から8月4日にかけて連日『東京朝日新聞』紙上で伝えられた。

既に東京では「朝日こどもの会」がこの年の6月に創立されており、この「海の子供会」は、『コドモの本』（1932年9月号8頁）では「第四回 朝日こどもの会」として写真付きで紹介された。しかし、『東京朝日新聞』掲載

¹³⁹「[青空の下のコドモの会について] その都度朝日新聞紙上でお知らせしてをります。」

『コドモの本』1933年12月号表表紙裏。

¹⁴⁰「くはしいことは 大阪の方は朝日会館事務所へ／東京の方は東朝計画部へお問合せ下さい」（「朝日新聞社会事業団のコドモのための文化事業」『コドモの本』1934年3月号27頁）。朝日こどもの会の冒頭では、東京朝日新聞社計画部長（成澤金兵衛）が挨拶をすることが恒例だったようだ（『コドモの本』1934年6月号24頁、1934年8月号24頁、1934年9月号24頁）。成澤金兵衛（玲川）は、1923年に創刊された日刊『アサヒグラフ』初代技術部長、1923年週刊『アサヒグラフ』の初代編集長、1926年に創刊された『アサヒカメラ』初代編集長として活躍した。朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（朝日新聞社、1991年、198-199頁）、金丸重嶺「写真界夜話（8）成沢玲川のこゝろ」『アサヒカメラ』（42巻5号、1957年7月、186-187頁）。

の「海の子供会」関連記事には「朝日こどもの会」の名前は出てこない。新聞紙上で参加者を募集していることから、この会が東京朝日新聞社主催の子供向けのイベントとして行われ、周知されていたことが見て取れる。この他にも、東京における「朝日こどもの会」の催しは『東京朝日新聞』では東京朝日新聞社主催のイベントとして告知されており、東京では東京朝日新聞社を中心として子供向け企画が行われていたことが推察される。先に挙げた1934年の東京の会の回数の記載の混乱は、東西の連携不足とともに、東京では子供向けのイベントはあくまでも朝日新聞社の催しとして行われており、朝日こどもの会として回数がカウントされていたわけではなかった可能性を示唆している。

印刷媒体における子供の取り込み方も、大阪と東京の朝日新聞社では異なっていた。大阪で朝日会館における子供向けの文化活動が続けられるなか、『東京朝日新聞』は1931年5月24日より毎週日曜の朝刊第十面に「コドモ」欄（のち「日曜ページ」）を設けるという、『大阪朝日新聞』には見られない企画を始めている。「コドモ」欄には、童話・漫画・童謡・「手工の楽しみ」・複数の写真を使ったグラフ記事「子供の科学」などが満載されており、読み物の多い絵雑誌だった頃の『コドモの本』に非常に近いコンテンツが揃っていた。その後、「コドモ」欄（「日曜ページ」）は、1936年10月1日から水曜・金曜・日曜の夕刊に「こども」欄として掲載されていった¹⁴¹。加えて、前述したように、既に1922年には『東京朝日新聞』および『旬刊朝日』とその後継誌の『週刊朝日』で、また、翌1923年には『アサヒグラフ』で、それぞれ子供向けの企画が始まっていた。こうした状況から、大阪とは異なり、東京朝日新聞社における子供の取り込みは、同社発行の新聞・雑誌を中心に行われていたと言えよう。

その後、東西朝日の連携を強化しようとする動きは出たものの、両者の懸隔は依然として続いた。1938年（昭和13年）8月25日には出版局が新設され、新聞以外の刊行物は全て出版局で編集発行し、その販売と広告も行うこととした¹⁴²。出版局は出版営業と出版広告の担当者を吸収し、東西朝日で

¹⁴¹「おしらせ」『東京朝日新聞』1936年10月4日夕刊第四面。

¹⁴²これより先、1922年（大正11年）2月、大阪朝日新聞社は編輯局のなかに出版部を設置（1924年／大正3年12月に新設され1926年／大正5年4月末に一度解消され

別々だった出版の編集・営業活動も一元化された。これにより、両社間の連携は改善されたが、新機構のもとでも、『週刊朝日』『アサヒスポーツ』『コドモアサヒ』『婦人朝日』『大阪朝日新聞縮刷版』は大阪朝日で、『アサヒグラフ』『アサヒカメラ』『映画朝日』『アサヒグラフ海外版』『東京朝日新聞縮刷版』は東京朝日でそれぞれ編集・発行し、その他の図書は両社で別々に企画・出版することには変わりはなかった¹⁴³。

5. むすびに変えて——『コドモの本』に携わっていた人々と見落とされた側面

このように、1931年から1935年にかけて『コドモの本』は、朝日新聞社の販促品という側面を残しつつ、大阪・朝日会館におけるコドモの会の機関誌として始まり、全国に向けた文化的・教育的な子供向け雑誌の時期を経て、関西を中心に各地のアサヒ・コドモの会の活動と密接に連動した子ども向けグラフ誌へと変貌を遂げていった。冒頭で見たように、販促を兼ねた文化的・教育的な子供向け冊子は当時様々な企業から発行されていたが、『コドモの本』は、コドモの会の活動と連動していた点に特色があったと言える。ただし、会の活動が地域によってかなり異なっていたうえに、朝日新聞社内の東西の連携不足もあり、「場」に規定された活動内容を全国的に共有する体制が十分に整っていなかったこと、さらには、大阪朝日新聞社と東京朝日新聞社における子供関連企画の在り方自体の違いなどから、コドモの会の活動と連動した『コドモの本』の誌面が全国的に展開されることはなかつ

ていたのを復活させたもの。後の出版局の前身)、従来計画部に属していた出版に関する事務を出版部の担当とした。出版部長は整理部長だった鎌田敬四郎がなり、兼務も含めて16人の部員が社会部、学芸部、京都通信部などから選拔され、東朝からは調査部長の杉村楚冠人が『旬刊朝日』関係の編集事務を兼務した。出版部の主な仕事は『旬刊朝日』の発行にあったようだという（朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（朝日新聞社、1991年、193頁）。

¹⁴³朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（朝日新聞社、1991年、505-506頁）。初代出版局長は、当時大朝営業局長だった飯島幡司が起用され、出版編輯部長を兼務し、出版編輯部次長兼週刊朝日編輯長には樋口正徳、同次長兼アサヒグラフ編輯長に比佐友香、アサヒカメラ・映画朝日編輯主任に松野志気雄、アサヒスポーツ編輯長には藤木九三が就任、出版局営業部長には九州支社営業部長・大塚貞三が起用された。

た。

最後に、『コドモの本』に携わっていた人々と、同誌では見落とされがちだった側面について言及して、本稿の結びとしたい。

『コドモの本』に携わった者には、社会主義に共感を覚え（もしくは社会主義に共感した過去を持ち）、社会の不平等に心を痛めていた人物が少なくなかった。編集人の高瀬嘉男（無絃）は、関西学院を卒業後、1929年末に小川未明を盟主に結成されたアナーキズム系の自由芸術家連盟の主要メンバーとなったものの、1931年頃には離れ、以降はキリスト教系の少年少女雑誌『光の子』や『日曜学校の友』に口演童話・宗教童話・児童劇などを発表していた人物だった¹⁴⁴。また、『コドモの本』発行人で、その編集とコドモの会の各種活動に関わっていたと思われる高尾亮雄（楓蔭）も、お伽芝居など子供向けの文化活動に傾倒するより前には、1903年4月に児玉花外・奥村梅臯らとともに大阪社会主義研究会を結成し¹⁴⁵、1905年4月には森近運平が始めた大阪平民社の社会主義研究会に出席し森近とはほぼ交互に発表、後に幸徳事件（大逆事件）で処刑される森近や管野スガらと交流するなど、社会主義思想に強くひかれていた数年間があった¹⁴⁶。『コドモの本』寄稿者にも、1919年に労働文学の雑誌『黒煙』を創刊し1920年に日本社会主義同盟の創立发起人となった小川未明のように、何らかの社会主義的な思想に共鳴していた者が少なくない。

しかし、彼らのこうした思想的な側面は、『コドモの本』には直接的には

¹⁴⁴ 上笙一郎「無絃＝高瀬嘉男と尾関岩ニ(上)」『日本古書通信』第897号 2004年12-13頁、「高瀬無絃」日本児童文学会編『児童文学事典』東京書籍、1988年、443頁。高瀬は翻訳家としても活躍し、エリック・ナイト『名犬ラッシー』（岩崎書店、1963年）、マーガレット・サットン『少女探偵ジュディ』（金の星社、1964年）、グレース・G・シートン『シートン夫人の動物旅行』（至誠堂、1968年）などを訳している。翻訳書については国立国会図書館サーチの情報に依る。

¹⁴⁵ 1903年8月に刊行した『社会主義詩集』が発禁になった児玉花外が1904年に『花外詩集』を大阪・金尾文淵堂から出すと、岩野泡鳴、徳田秋声、薄田泣菫、奥村梅臯、三宅磐らとともに高尾も、詩集に附された「同情録」に発禁を嘆く文章を和歌山実業新聞記者として寄せている（堀田前掲文、1991年、110-111頁）。

¹⁴⁶ 森近運平が創刊した『大阪平民新聞』1907年6月1日号に「大阪の平民社（思出草）」を発表して以降、高尾は社会主義運動には関わっていない（堀田前掲論文、2012年、186-187頁／10-11頁）。

あらわれてこない。社会の不平等に対する問題関心は、朝日会館の運営を担っていた朝日新聞社会事業団による諸活動によって担われていた。1927年に創設された朝日新聞社会事業団は、「意義ある催しもの」による純益金と寄付金を用いて「より善い社会」「社会協同」の実現という理想を掲げ、「公衆衛生訪問婦協会」「農繁期託児所」「青少年女保護事業」「子供万国婦人委員」「同情週間」に関わる活動を行っていた¹⁴⁷。とりわけ、年末の「同情週間」は『コドモの本』でも毎年取り上げられ、読者にもなじみの深い活動だった。「同情週間」は、1923年に関東大震災後の東京朝日新聞社で試みられたのち、大阪朝日新聞社でも1926年から第一回が開始され、1927年からはこの年に創設された朝日社会事業団によって募金運動も行われるようになる。この年末の募金運動で集められた募金（「義金」）は、「失業病氣等あらゆる方面から生活力を失つて同報の援助救済をまつてゐる」層の救護のために、「各社会事業団体、警察、区役所、朝日新聞社会事業団直轄救済費」（当初は大阪市のみ、1930年からは京阪神三都市）に充てられた¹⁴⁸。

しかしながら、『會館藝術』でも『コドモの本』でも、朝日新聞社会事業団による貧困層への支援活動の実施状況や寄付先などは記されるものの¹⁴⁹、支援の対象となる人々の暮らしぶりや考えに具体的に思いを寄せさせるような記事や創作は、ほとんど掲載されていない。わずかに、横歩きの「蟹」に朝鮮半島出身者を仮託したと思しき金素雲の童話「蟹の学校」¹⁵⁰と子供達から寄せられた投稿作品¹⁵¹に当時の社会のゆがみが示唆されているものの、

¹⁴⁷ 辻村又男「朝日新聞社会事業団の近況」『會館藝術』1931年5月号20頁。

¹⁴⁸ 朝日新聞社会事業団「本年度同情週間について」『會館藝術』1931年12月号41頁。

¹⁴⁹ 「〔112円60銭の義金は〕貧しい方々のために献げました。」（1934年2月号17頁）、
「気の毒なコドモたちへのプレゼントにいたしました。」（1934年2月号23頁）。

¹⁵⁰ 「横匍い」をする蟹の一家の子蟹「泡吉」が、親蟹の期待を受けて遠い浜辺の学校でまっすぐ歩くことを学んだものの、帰省でひと夏を両親と過ごし、再び横匍いをする「もとの野良蟹」になってしまったという話（『コドモの本』1934年1月号14-15頁）。

¹⁵¹ 『コドモの本』1934年9月号16頁の「作品のページ」には朝鮮平北定州公立普通校の3名の「巫女」を扱った綴方（作文）が掲載されているが、そのうち2つは「巫女は悪い人」「あれでも人間かなと思ふ」と徹底して巫女の文化を否定するものだった。また、1934年7月号18頁には、下校中に「今年朝鮮からきなつた一年生の木村さん」がはやし立てられているのを見て、「木村さんも同じ日本の子供ですから、いぢ

こうした作品や同情週間に関する記事から、朝鮮の人々あるいは義金が贈られた「貧しい方々」「気の毒なコドモたち」が置かれた状況に子供読者が想いを馳せることは難しかったことだろう。このあたりに『コドモの本』の限界があったと言える。

もう一つ、『コドモの本』および関連活動で注目されるのは、女性がかなり関わっていたということである。創刊当初から女性の執筆者の名前が見られ、月刊誌となった最初の号（1932年4月号）の「編輯後記」（24頁）に小川未明らとともに列挙された主な執筆者13名のうち2名（奥野壽枝、福井千代子）は女性だった。1933年6月号の「編輯だより」（24頁）には、「今月から、いつも美しいさしゑをかいて下さる櫻井悦先生が、編集部のお仕事をお手伝ひ下さることになりました」とあり、編集にも女性に関わっていたことがわかる¹⁵²。画家の櫻井悦は「青空の下のコドモ会」の引率もしており、編集だけではなく、コドモの会の運営にも携わっていたようだ¹⁵³。コドモ・アテネの講師としても女性は活躍しており、1934年の第二回コドモ夏季講座「絵を習ふ会」では、中之島洋画研究所（旧・信濃橋洋画研究所）会員を中心とする講師陣14名中4名が『コドモの本』で表紙や挿絵を担当していた女性の画家だった¹⁵⁴。コドモ・アテネの音楽部にも女性講師の名前が見られる¹⁵⁵。創作活動をしたいと考えている女性にとって、『コドモの本』やコドモ・アテネのような子供向けの文化活動は、女性が参入できる貴重な機会となっていたことがうかがわれる。

朝日会館で行われていた子供向けの文化活動には、こうした様々な人々の理想や希望が詰まっていた。その後、次第に軍靴の音が鳴り響く世になって

めなくてもよいのに」と思い、涙が出そうになったという作文「かはいさうな木村さん（鮮人）」が鳥取から寄せられている。

¹⁵² 櫻井悦は1934年1月号までだった。「永らく皆さんを心から愛しいたはつて下すつたアサヒ・コドモ・アテネ絵画部の先生で本誌編集部にてをられた櫻井悦先生が今度御都合で御辞職されることになりました。」（「編輯だより」『コドモの本』1934年1月号24頁）。

¹⁵³ 「8月12、13日六甲キャンピングの想ひ出」『コドモの本』1933年9月号20頁。

¹⁵⁴ 「第2回コドモ夏季講座 絵を習ふ会」『コドモの本』1934年9月号22頁。

¹⁵⁵ 山田耕筈・小林宗作らとともに金森愛子と矢野八重子の名前も講師として記されている。「朝日新聞社会事業団のコドモのための文化事業」『コドモの本』1934年3月号27頁。

いくなかで、コドモの会と『コドモの本』はどのように展開していったのだろうか。どこかに眠っている『コドモの会』が発見されることを願わずにはいられない。

<大阪・神戸・京都・横浜・東京におけるコドモの会の活動内容(大阪は抜粋)>

*大阪アサヒ・コドモの会（朝日会館にて開催）（第69回：1932年4月号24頁、第82回：1933年4月号表表紙裏、第94回：1934年4月号25頁、1935年5月号24-25頁記載の活動。この他にもほぼ毎号記載有り）

・第69回（1932年3月20日）：コドモ・アテネのコーラス部による会歌合唱・本社選定「肉弾三勇士」、山本一喜少年による本社募集当選童謡「満州慰問の歌」四つ独唱、メトロ社全トーカー（「赤ん坊魂」・漫画「蛙の活動狂」「蛙の技師さん」「アフリカは唸る」「メトロトーン・ニュース」数巻の封切公開）、関西童話劇団聯盟の「少年七月座」による童話劇「をさな道真」、教育手工「土から生れるライオン」（富永豊泉）、アサヒ・シンブン時事映画（「肉弾三勇士のあとを偲ぶ」「満州国執政溥儀氏の就任式」「海陸聯合上海総攻撃」）

・第82回（1933年3月12日）：影絵のある童話劇、「アサヒ・コドモ・アテネ」舞踊科生のリズム舞踊、「アサヒ・コドモ・アテネ」コーラス科生によるアサヒ・コドモの会の歌の合唱、山村常乙女嬢の舞「越後獅子」、人形小劇場による人形芝居「悪者退治」

・第94回（1934年3月4日）：アサヒ・コドモ・アテネ会員のピアノ独弾、童心座による影絵をどり芝居「小野道風」、アテネ舞踊科生の日本舞踊、市立高女生の合唱と独唱、映画（児童映画「無敵ターザン」十巻、シリイ・シムフオニイの漫画）

・第109回（1935年4月3日）：アテネ声楽科による会歌の斉唱、舞踊科によるワルツほか四曲、ミナト童謡舞踊研究科による東海道七景とミナト音頭の踊り、明浄高等女学校二年生による花祭の歌と新舞踊三曲、奇術のコミック「おみやげ」・曲芸「一輪車曲乗」、児童映画「トーカー漫画大会」（メトロ社のホツパ、パラマウント社のボパイ、ユナイテッド社のシリイシムホニイ）・「朝日世界ニュース」二巻・鉄道省撮影「風景映画」数巻

*神戸アサヒ・コドモの会（神戸会堂にて開催）（第1回：1935年5月号26

頁、第3回：1935年7月号25頁、第5回：1935年9月号7頁、第8回：1935年12月号14-15頁)

・第1回(1935年4月7日)：「西村本社神戸支局長の開会の御挨拶」、「アサヒ・コドモ・アテネ」コーラス部によるコドモの会歌斉唱、声楽専科の独唱斉唱、舞踊科、ハーモニカ、ピアノ科など、「神戸松陰高女のお姉さま方」による童謡歌唱、「余興の奇術と曲芸」、「トーキー漫画大会」、おみやげの「アサヒ・コドモの本」四月号(1935年5月号26頁)。

・第3回(1935年6月9日)：「市立第二高女のお姉さま達」「アサヒ・コドモの会の歌」の斉唱・二部合唱・独唱、小寺流新児童舞踊、新奇術(佐々木清次郎)、「七星会」による児童舞踊、映画「釣鐘草」(1935年7月号25頁)

・第5回(8月11日)：「東京からわざ／＼来て下さったアサノ児童劇学校による「ざるのかんむり万歳」、大長一行の皿廻し、松壽幼稚園生による合唱・ピアノ独弾

・第8回(11月10日)：神戸女学院高等女学部による三部合唱「子守唄」、雲中幼稚園の遊戯「茶の樹」「朝道小道」、須磨幼稚園の歌「ピクニック」・遊戯「金時さんなら」、田中チャプリンの「盥廻し」

＊京都アサヒ・コドモの会(京都朝日会館にて開催)(第2回：『コドモの本』1935年12月号2頁)

・第2回(1935年10月27日)：京都声楽研究会児童部による三部合唱、鈴蘭童謡音楽園の児童舞踊、京都声楽研究会児童による独唱、独楽まわし(松井源水)。

＊横浜朝日コドモ会(横浜朝日講堂にて開催)(第28回・第29回：『コドモの本』1935年9月号7頁、第33回・第34回：『コドモの本』1935年12月号6-7頁)

・第28回・第29回(8月10日・8月24日)：童心舞踊研究会による「証城寺の狸ばやし」(その他の演目は不明)

・第33回(1935年10月26日(土))：漫画映画「新鹽原多助」(三巻)、「賀川一郎先生(横浜商業学校教諭)指導振付の可愛い少女たちの舞踊」、「間門小学校の澁谷将先生の『三吉猿』のお話」、舞踊、映画(喜劇『妖怪退治』・時代劇『水戸黄門』、童話劇『青い鳥』)

・第34回(1935年11月9日(土))：映画(動物実写『ザンバ』・漫画『海の水は何故からい』・喜劇『お転婆サリー』)、横浜正実音楽院生徒の音楽と舞踊、朝日コドモ会の歌合唱、映画(漫画『雲雀の宿がへ』・喜劇『子宝百万両』・喜劇『飛行家ラリー』・時代劇『赤垣源蔵』)、「来会の坊ちゃん嬢ちゃんに「コドモの本」を差上げました。」

*東京の朝日こどもの会(東京朝日新聞社講堂にて開催)(第4回：1932年9月号8頁；第6回・第7回：1933年2月号16頁、第8回：1933年3月号14頁、第9回：1933年5月号14頁、第11回・高原のこどもの会：1933年9月号9頁、第12回：1933年11月号16頁、第13回：1933年12月号10-11頁、第15回：1934年2月号17頁、第16回：1934年3月号9頁、第?回：1934年5月号24頁、第17回：1934年6月号24頁、第19回：1934年8月号24頁・1934年9月号24頁、第21回：1934年11月号1頁
・第4回朝日こどもの会「海上こどもの会」(1932年8月3日)

・第6回(1932年12月17日)：アメリカン・スクールの「可愛い西洋のお子さん達の出演」によるヴァイオリン独奏、児童歌劇、銀座教会とひつじ幼稚園の「小さい方」が合唱と独唱、「四谷区第一尋常小学校生徒さん」が児童劇、パラマウントのトーキー

・第7回(1933年1月14日)：「新年朝日ニュース」「多門師団の凱旋」など朝日トーキー映画三巻、パラマウントの漫画「地球競売」、日本コロムビア専属歌手・大川澄子・佐々木行綱・中島けい子の童謡、パラマウントのトーキー映画「王様ごっこ」八巻、「学者犬、トミー君の実演」

・第8回(1933年2月25日(土))：「漫画でおなじみの横山隆一先生の切り抜き影絵」「児童劇「雀のお宿」と「桃太郎」の二幕を童友会のお嬢さん達が、芝居気たつぷりで演じました」「朝日トーキーニュース映画、パラマウントの漫画、パラマウントの腕白大将等全部で十巻のトーキー映画」

・第9回(1933年4月15日(土))：「深川区南小学校男女児童のオーケストラ」、「最新奇術と霊交術」(大宮太洋の一团)、児童歌劇「街の飴売り」(「浅草区富士小学校ふたば会のお嬢さん達」)、映画(ユナイ特社の天然色トーキー漫画「森の朝」と「人魚と海賊」、「本社特派員撮影の熱河事件の戦争トーキー映画四巻の映写」)

(・第10回 1933年5月20日「第十回「朝日こどもの会」(東京)」と予定

の記載のみ 1933 年 5 月号 1 頁に有り)

・第 11 回 (1933 年 6 月 27 日):「日本一健康優良児表彰お祝ひの会」(「日本一の健康優良児と準日本一児童の表彰式」「鳩山文部大臣や山本内務大臣も見え」「その状況は、ラヂオで全国へ中継放送されました」)(9 頁)

(1933 年 8 月 1-4 日:「高原こどもの会 (信州霧ヶ峰)」)

・第 12 回 (1933 年 9 月 30 日 (土)):「神田小学校生徒による舞踊、白菊児童劇場のお子さん達の童謡劇映画 (パラマウントのトーキー・ニュース、トーキー・ニュース三巻、朝日新聞社製作のトーキー「護れ大空」)

・第 13 回 (1933 年 10 月 28 日 (土)):豊島師範学校附属小学校尋常科二年の「お嬢さん達」による児童劇『海の出来事』、金春流『仕舞』(「櫻間道雄先生のお弟子さん」の小学校四年生と二年生の兄弟が舞う)、大森舞踊研究所の「お嬢さん方」の舞踊(「チユンチュク雀」「離れ小島」など八つ)、映画(本社のトーキーニュース寿月号、メトロ社の「僕の武勇伝」)

(・第 14 回 1933 年 11 月 18 日「第十四回「朝日こどもの会」(東京)」と予定のみ 1933 年 11 月号 1 頁にあり)

・第 15 回 (1933 年 12 月 23 日 (土)):石井小波舞踊団児童による学校舞踊、オトブレ会子供部員による音楽、花柳壽二郎門下児童によるおとぎ舞踊、野村児童楽園生徒による児童劇、発声映画「マルガ」、集まった会費 112 円 60 銭は「全部同情週間の義金となりまして、貧しい方々のために献げました。」

・第 16 回 (1934 年 1 月 27 日 (土)):コロムビア専属児童による独唱と青い鳥音楽学校生による斉唱、美成会児童出演による舞踊、青山尋常小学校児童(五年生)による児童劇「権兵衛がたねまきや」、全発声映画「少年忠臣蔵」11 巻(澤村宗之助三兄弟主演)

・第? 回 (1934 年 3 月 26 日):杉並第五小学校生徒の音楽と舞踊、「おなじみの佐藤秀雄先生のハーモニカ」、「ポリドール専属のお子さん方の童謡舞踊」、「レコードでおなじみの永岡志津子さんの歌と仲よし舞踊団の皆さんの踊り」(※ 1934 年 3 月号 1 頁には「3 月 3 日 第十八回「朝日こどもの会」(東京)」の記載有り、しかし 1934 年 6 月号には 5 月 5 日に開催された「第 17 回 朝日こどもの会」の記事が掲載される)

・第 17 回 (1934 年 5 月 5 日 (土)):コロムビア・オーケストラ楽手と青い鳥童謡音楽学校の生徒、佐々木すぐるの指揮による文部省謹作・皇太子殿下

御誕生奉祝歌、山田耕筰指揮による健康児の歌（山田耕筰作曲）の発表、「山田先生の親切的指導」による「練習」、青山師範附属小学校の児童による「洪井二夫先生振付の体育ダンス」（健康児の歌）、日本健康ルール（昨年本社懸賞募集当選健康十則）、野村児童学園の児童による児童劇「アンナの行つた国」四幕（野村政夫作・作曲・指揮）、パラマウント社超特作お伽映画『不思議の国のアリス』八巻。

・第19回「お手柄犬の表彰こどもの会」（1934年7月11日（水））：成沢東朝計画部長の挨拶、藤沼警視総監代理・三島警務部長の祝辞、銀賞牌付頸輪贈呈、「映画や舞台でもお馴染の井上正夫先生が、愛犬フミ子ちゃんに代つてお話」、帝国軍用犬協会による軍用犬訓練の実演、表彰犬七頭出席（※1934年7月号1頁には「7月7日 第十九回「朝日こどもの会」（東京）」との記載有り）

・第20回（1934年9月29日？）：1934年9月号1頁に開催予定のみ記載

・第21回（1934年11月17日？）：1934年11月号1頁に開催予定のみ記載